

土 淨

號 月 二 十

昭和十年五月廿日第三種郵便物認可（毎月一四二日發行）
昭和十七年十一月廿日印刷納本・昭和十七年十二月二日發行

第八卷 第十二號



金

陸海軍 慰問浄土

全國の陸海軍病院に月々新刊の信仰雜誌「浄土」を贈つて白衣の勇士の方々に法味を愛樂して頂くために、この運動を始めてから既に三ヶ年になりました。その間全國津々浦々から赤誠の籠つた御援助を頂き既に七千數百圓余の御寄附が集りました。延數にして十二萬餘冊の浄土があらゆる軍病院に贈られ、勇士の方々から大變よろこばれてをります。多數の感謝の言葉が寄せられました。その意義については最早贅言を要せぬこの聖なる運動にはなほ多數の御参加をお願い致します。

白衣の勇士に法味を捧げよ

- ◆全國陸海軍病院の全部へ毎月三十部乃至百部の雜誌「浄土」を贈呈して白衣の勇士達に法味を捧げてをります。
- ◆一口一圓五十錢の浄財を御喜捨下さい。それによつて一年間毎月雜誌が病院へ参ります。
- ◆毎月五千部以上は是非入用です。少くも五千人の有志者が必要です。御奮發下さい。
- ◆個人でも、團體でも、亦金高が一口以下でも結構です。兎も角この聖き運動に隨喜參加して下さい。
- ◆御送金は浄土宗務所事變部宛に！ 領收の證には宗報誌上及び「浄土」に御芳名を掲載します。

知恩院門跡
土宗管長
上主
法增淨

新刊

稀代の善知識に私淑せよ

行誠上人

郁芳隨圓猊下
序・増谷文雄著
大島徹水臺下

◇近世不世出の高僧、行誠上人の全傳成る◇

謹嚴にしてしかも脱俗洒々たる上人の風格は最大の魅力！上人の言行がそのまゝ信仰である。

學識に德行に一世に秀でた上人によつて、廢佛毀釋にあつた佛教界が指導された。更にまた上人の和歌、詩、書、畫はみな一流一家をなしてゐた。文の簡麗なる、筆の猷美なる他に求むべくもない。上人に傾倒する著者が渾身描き出した興味つきざる近來の名著。

B6版二百三十頁
定價一圓五十錢
送料十二錢

言説・行業は直ちに讀者を感化せずにおかない！！

内 容

口繪・序文

一、學僧としての行誠上人
上人はかく學び給ふた・學問に於ける主張と業績

二、高德を偲びて

上人の風格のこと・芳躅をたどりて・遺書につきて

三、御一新の渦中に立ちて
廢佛毀釋の真相につきて・肉食妻帶とたたかふ・毅然として識見を
持す

四、上人の文藻に就きて

上人の短歌に就きて・上人の紀行につきて・上人の詩と書と畫につきて

附 録

著作解説

年譜

發行所 法然上人鑽仰會 振替東京市芝區芝公園明照會館 七八一

淨 土

十二月號

人に後世のこと申けるついで
に、往生は魚食せぬものこそすれ
といふ人あり。或は魚食するもの
こそすれといふ人あり。とかく論
じけるを、上人きゝ給て、魚くふ
もの往生をせんには難ぞせんず
る。魚くはぬものせんには難ぞせ
んずる。くふにもよらず、くはぬ
にもよらず、ただ念佛申もの往生
はするとぞ、源空はしりたりとぞ
仰られける。

法然上人御法語



詔書

天佑ヲ保有シ萬世一系ノ皇祚ヲ踐メル大日本帝國天皇ハ
天祐ヲ保有シ萬世一系ノ皇祚ヲ踐メル大日本帝國天皇ハ
昭ニ忠誠勇武ナル汝有衆ニシス

朕茲ニ米國及英國ニ對シテ戰ヲ宣ス朕カ陸海將兵ハ
全力ヲ奮テ交戰ニ從事シ朕カ百僚有司ハ勦精職務ヲ奉行
シ朕カ眾庶ハ各々其ノ本分ヲ盡シ億兆一心國家ノ總力ヲ
擧ケテ征戰ノ目的ヲ達成スルニ遺算ナカラムコトヲ期セ

抑々東亞ノ安定ヲ確保シ以テ世界ノ平和ニ寄與スルハ至
顯ナル皇祖考丕承ナル皇考ノ作述セル遠猷ニシテ朕カ拳
々措カサル所而シテ列國トノ交誼ヲ篤クシ萬邦共榮ノ
樂ヲ偕ニスルハ之亦帝國カ常ニ國交ノ要義ト爲ス所ナ
リ今ヤ不幸ニシテ米英兩國ノ釁端ヲ開クニ至ル洵ニ已ム
ヲ得サルモノアリ豈朕カ志ナラムヤ中華民國政府曩ニ
帝國ノ眞意ヲ解セス濫ニ事ヲ構ヘテ東亞ノ平和ヲ攪亂シ
遂ニ帝國ヲシテ干戈ヲ執ルニ至ラシメ茲ニ四年有餘ヲ經
タリ幸ニ國民政府更新スルアリ帝國ハ之ト善隣ノ誼ヲ

大詔奉戴一周年を迎へて

知恩院門跡
淨土宗管長
大僧正

郁芳隨圓

昭和十六年十二月八日、大詔は頒發せられ米英に對して戰が
宣せられてより茲に滿一ケ年。わが國民として忘れることのでき
ぬ記念日を迎へました。わが國は肇國以來、艱難に遭遇すること
一再ではありませんでした。が、國家としてこれほどの重大事は曾
てありません。この日の感動は今なほ生々しく甦へるところであ
ります。今や、わが國は此日より皇國の歴史の新たる段階に入り
ました。今までとは違つて、わが國が中心となつて、皇道に基い
た歴史を世界の上に創造してゆかねばならないのであります。

戰宣せられるや、忠勇なるわが將士は空に海に陸に赫々の武
勳を立て、北はアリユーシヤン群島より南はソロモン群島に至る
七千キロ、東はウエーキ島より西は印度洋に至る二萬キロを制壓
して、大東亞共榮圈建設の礎石を築いたことは寔に喜ばしいこと
で、これ偏に世界に比肩するもののない皇軍の武勇によることと
感謝感激に堪へざるところであります。思ふに、わが國が中心と
なつて築きつゝある大東亞共榮圈は、各々の民族が互にその所を
得て、偕に樂しみ合ふ世界でなくてはなりません。一が他を

結ヒ相提攜スルニ至レルモ重慶ニ殘存スル政權ハ米英ノ
庇蔭ヲ恃ミテ兄弟尙未タ牆ニ相閤クヲ悛メス米英兩國ハ
殘存政權ヲ支援シテ東亞ノ禍亂ヲ助長シ平和ノ美名ニ匿
レテ東洋制覇ノ非望ヲ逞ウセムトス剩ヘ與國ヲ誘ヒ
帝國ノ周邊ニ於テ武備ヲ增強シテ我ニ挑戰シ更ニ帝國ノ
平和の通商ニ有ラユル妨害ヲ與ヘ遂ニ經濟斷交ヲ敢テシ
帝國ノ生存ニ重大ナル脅威ヲ加フ朕ハ政府ヲシテ事態ヲ
平和ノ裡ニ回復セシメムトシ隱忍久シキニ彌リタルモ彼
ハ毫モ交譲ノ精神ナク徒ニ時局ヲ解決ヲ遷延セシメテ
此ノ間却ツテ益々經濟上軍事上ノ脅威ヲ増大シ以テ我ヲ
屈從セシメムトス斯ノ如クニシテ推移セムカ東亞安定ニ
關スル帝國積年ノ努力ハ悉ク水泡ニ歸シ帝國ノ存立亦
正ニ危殆ニ瀕セリ事既ニ此ニ至ル帝國ハ今ヤ自存自衛ノ
爲斷然起ツテ一切ノ障礙ヲ破碎スルノ外ナキナリ
皇祖皇宗ノ神靈上ニ在リ朕ハ汝有眾ノ忠誠勇武ニ信倚
シ祖宗ノ遺業ヲ恢弘シ速ニ禍根ヲ芟除シテ東亞永遠ノ
平和ヲ確立シ以テ帝國ノ光榮ヲ保全セムコトヲ期ス

御名 御璽

昭和十六年十二月八日

力によつて壓服した世界ではなく、心と心とが照し合ふ信頼の世
界、道義の世界でなければなりません。われわれがいま築きつづ
ある將來の歴史の根本を貫くものは大慈悲心でなければなりません。
今後に於ける宗教の使命が如何に重大であるかを再省すべき
であります。偶然にも、十二月八日は東亞の光たる佛陀が大覺
を成せられて、新たなる光明と信念とを以て、世界に呼びかけた
日であります。教徒は年々この日に成道會を勤めて佛陀の慈恩に
酬いてをります。

然らば佛陀の大覺とは何ぞや。それはこの小さき我、この勝手
氣儘な個人を滅して、大きな我、すなはち御國の爲に生きること
であります。

大君の御爲に醜の御權となることであります。宗祖法然上人は
全佛教を念佛の一行三昧のうちに結歸なされましたが、淨土教の
信行は、日々の生活のうちに、無我奉公の實踐となつてその精華
を顯さねばなりません。

畏くも詔書には

朕が衆庶ハ各々其ノ本分ヲ盡シ億兆一心國家ノ總力ヲ擧ゲテ征
戰ノ目的ヲ達成スルニ違算ナカラシムコトヲ期セヨ

と仰せられてあります。緒戦の輝しい戦果に満足することなく
戦ひ抜き勝ち抜いて征戰の目的を達成して、淨土教徒としての本
分を盡し、以て聖慮を安んじ奉らねばなりません。



聖典
講話

歎佛偈講義……八……

必勝は忍苦から

大野 法道

前月號に施について可なり委しく話したが、この施なるものは、わが身に持つてゐるものを、快く他人に頒ち與へて、その喜びを共にする大慈悲の心から出るものである。この大慈悲は佛の心の本質を成すものであつて、恰も泉の湧き出るやうにいくらでも施を行じてゆくのである。こゝに不思議なことがある。欲張つたり貪りの心で考へると、自分の持つてゐるものを、それからそれと施して行つたら、だん／＼持ち合せが減つてしまひ、最後には無一物になつて、何物も無くなつてしまふと思ふであらうが、大慈悲の心からする施は、いくら與へても減らぬばかりか、いよ／＼それによつて施を行する力が強くなり、ますます施さずには居られなくなるのが佛である。大東亞戦争

は日本が本來具へてゐるところの養正の徳を、八紘爲宇の大理想に基いて東亞の諸國に頒ち與へて、本當にあるべき姿の大東亞に立ち歸らしめ、共榮の喜びを共にしやうとする、大施の戦争である。この大施は施せば施すほど豊かになり強くなつて、共榮ともにもますますその力を大きくするであらう。故に米英式の貪りの心で見ても、この大戦が持つ崇高なる大施の意味は判らないであらう。幸に東亞の諸國にあつては、既に日本を了解し、着々本來の姿に還つて、共榮の樂土の建設に進みつゝあるのである。

二

第九偈の初めに「布施調意」とある調意は、心を調へ正しくすることである。

人の心は捨てゝ置けば、ある程度のひきしまりはあるに

しても、弛んだり亂れたり飛び上つたりして、自分だけに都合のよい我がまゝ勝手なことを考へ出しがちなものである。之では人間の尊さは保たれないからせひとも、或る轡をはめて調正せねばならない。

一體、近代人は明朗とか、自然のまゝとか、開放とか、自由とか、好きで、何によらず轡をはめることは嫌ひといふことになつてゐる。がしかし之は程度問題であつて、底なしになつてしまつたのでは、眞の人生は出てくるものではないから、やはり外から制限を加へて引きしめる必要があり、内には自ら軌準を立て、調正をしてゆくべきであらう。されば支那事變このかた種々の統制が設けられるやうになつたのは、近代精神なるものを轉回して、眞にあるべき姿の人生を、打ち出す道に向つたものとして、歡迎迎ふべきであると思ふ。佛教では調正の道について、種々に説くのであるが、六波羅蜜もその中の一つである。こゝでは布施だけに「調意」としてあるけれども、實は六波羅蜜のすべてが調意を顯はす姿である。

できるだけ多くの物を、わがものにしやうとする貪りでなく、大施の心で共に喜ぶのが施、この人生を有意義に働かせ、すべて物を大切にして、憤みと勵みを失はぬのが

戒、大目標を立て、それに邁進しゆく時、路傍の小さい苦難を問題にしないのが忍、誠意を以て確實に努めるのが進、一心が定、眞實なるものをつかむのが慧である。故に心の垢であるところの、貪り、無責任とわがま、驕り、怠惰、輕舉妄動、愚迷を拭ひ去つて調正し、心の光を磨きだすものが六波羅蜜である。之が菩薩行の首班として、佛に通づる道とされてゐる。

三

次は忍である。

佛教では多く忍辱といふ語を用ひる。之は辱しめを忍ぶことで、ひどい目に合はされても腹を立てないといふ意味であるが、實はもつと廣く忍苦といふことを考へていゝ。忍苦といふても、忍べることゝ忍べぬ事とある。それでは忍べる範圍内で忍べばいいことになつて、之を菩薩行として取り上げる程のものでは無いやうに思はれるが、さうではない。

日本人に取つて、忍べぬ事はたゞ一つだけである。その他の一切の苦難は、いかなる事柄にもせよ、悉く之を忍ぶ道はある筈であるから、忍べる事は非常に廣い。忍べる苦の事に堪忍袋を破つてしまつたのでは、菩薩行にはなら

ない。その忍べぬ事とは一大生命——金匱無缺の國體の尊嚴を知らずして、皇國に仇をなさんとするものある時である。この一大事の場合の外はすべて忍べる範圍内である。

腹が立つたり困つたりする場合、それを通り越すのに種類のやり方がある。第一は靜かに思ひかへして平氣になつて、あつさり水に流してしまふ。このやり方は綺麗でさつぱりしてゐるが、時にはうまく流れてゆかぬことがある。第二はこゝが堪忍のしどころと、疳の蟲を殺し、齒を喰ひしばつてじつとしてゐる。このやり方は、忍び難きを能く忍ぶと感心させられるだけに、當の本人はさぞつらいであらう。第三は今つき當つてゐる事より、更にひどい忍苦をしてゐる人と思ふ。第四は大目標に心を向ける。つまり眼を大きく開いて大きいものを見る。この三と四が一番樂なやり方である。事柄によつてこれらの中、何れでも適當に使へばよいのであるが、日常の心得としては、大きい事に心を向けるやり方を、しつかり擱んでおくのがいゝと思ふ。

四

昔から忍の代表となつてゐるのは韓信であるが、彼れが人の眼をくぐる時には、心の中に大將軍の姿を思ひ浮べてゐたに違ひない。

國民讀本卷六に載つてゐる「修行者と羅刹」の話も同様であるが、更に一層痛烈である。

或る山の中で、どこからともなく、色は匂へど 散りぬるを わが世誰ぞ 常ならむといふ歌が聞えて來た。それを耳にした修行者は、これほど美しい言葉は今まで聞いたことがない。その續きを聞かねばならぬと、聲のした方へ向つて行くと、驚くべし、そこには物凄い風體をした羅刹の鬼が、こちらを向いて身構へてゐるではないか。修行者はハツと思つたが、續きが聞きたい一念から、

今「色は匂へど……」と言つたのは、そなたであらう。どうぞ、あの續きを聞かせて下され。

と頼んだところ、羅刹の餌食になるなら聞かしてやらうとの強談に、修行者は覺悟をきめ、美しい言葉を終りまで聞く大目標に心を向け、命に代へる苦を忍んで遂に、

有爲の奥山 今日越えて 浅き夢見し 酔ひもせず

と言ふを聞き、喜んで羅刹に喰はれやうとした時、今まで羅刹と見えたのが、急に帝釋天の本身に復し、忍苦の極をものともせぬ、修行者のまことを賞讃するのであつた。この修行者は釋尊の前身だと傳へられてゐる。一大事の前に

一身を喜んで捨てるのは、前生からの釋尊の心である。

五

前線の勇士が、皇國を負ふて敢闘する大使命に張り切つて、あらゆる辛苦を乗り越えながら、戦つてゐて下されるのが、どうして忘れられやう。また日本文學報國會の人達によつて全國の「日本の母」が紹介されてゐるが、いづれも可愛いわが子を、二人までも三人までも皇國にさしげて、尙ほ且つ力強く、或は農耕に或は教壇に、或はその他にせつせと働いて居られる。その忍苦の心に思ひ到つて、たゞ／＼頭の下るのを覺えずには讀まれない事はかりである。この大なる事實に心を向けてゐたらいかなる苦難にも堪えられる筈であることがはつきりするであらう。忍苦の鏡を、前線の勇士や「日本の母」に見ることから、更に大きい事に思ひ至らねばならない。

それは大東亞戦争には、前線も銃後も息をそろへて忍の一字に徹し、あらゆる苦難を乗り越えぬ事實を示した暁に、最後の凱歌が擧ることである。必勝の信念は、ただ意氣込みだけのものではなく、忍苦を以て百年を行くところの、生活事實を内容とするものでなければならぬ。忍苦の生活は闘ひである。いかに小さい事でも忍苦した

だけ、それだけ必勝に近づくのであり、忍苦の心が弛んだり破れたりしたら、それだけ必勝の来る日が後れることになるから、毎日／＼力一ぱい忍苦を積み重ねた音聲で以て、最後の凱歌は歌はれると思ふて進みたいものである。

法然上人の言葉に、

一期（生涯を通じて）の念佛をとりあつめて、一度の往生は必ずする事也

といふのがある。最後に来る往生の凱歌は平生の念佛のつとめ（忍苦）と、切つてもきれぬ關係にある。

最近米國が打ちだした新手を見ると、陸つゞきの南米へ工作を始め、從來關係のなかつた海の彼方のアフリカへ手をのばし、更に西南アジアの獨立國までを誘ふとも、ロシアと聯絡を取つて、大東亞に向つて大がかりな經濟封鎖を目論見はじめたやうである。曾てはA B C Dの封鎖線で、日本を取り圍んだのとは事變り、實に大きい企である。之はたゞ場所が廣いだけだとはかりは言つて居られない。大きいものはどこまでも大きいに違ひないから、この大なる新手を見るにつけて、我々はいよいよそれに劣らぬ強大なる心構へを振り起しつゝ、忍苦に次ぐに忍苦を以てして、闘ひぬかねばならないのである。



實話

靈の堂守

貴族院書記官

石橋徳作

十つかり明けきつた朝の空氣の中に立つて
思はず一つ深呼吸をして胸を張つてみた。芝
増上寺の大殿で晨朝會の動行を終り、お説教
を聞いた私達は、麗らかな陽を一ぱいに浴び



ながら「今日も良いお天気さまで……」と談
り合つてダラダラ坂をおりてきた。するとそ
の時私の横から「もし／＼」と呼びとめる者
があつた。歳の頃六十を過ぎたと見える品の
よいお婆さんが私を呼んでゐた。
「ちよつとお同ひ致しますが、こちらのお坊
さまは病院にも來て頂けませうか……」
いきなり妙なことをきくと思つたが、
「さうですね、お招きがあれば何處にだつて
出掛けて下さるでせうよ」
と餘り氣乗りもしないで答へた。すると、
「やれやれ、それはどうも有難いことで……
まことに失禮ですが貴方さまはどちらの寺の
方ですか」

晨朝會の會員が幾十人ゐるか知らないが、
何れ毎朝顔を合せてゐるから大抵は見知つて
ゐる仲である。それをこの老婆は餘り奇妙な
ことをきくので、私は少々ゐるさくなつてき
た。しかし老婆の熱心な態度からそのまゝ知
らぬ顔をするわけにゆかぬ氣がした。
「私はお坊さんではありませんよ。役所に勤
めてゐる身ですが、少し考へることがあつて
こうしてお詣りにきてゐるのです」
「それは何うも失禮を申しました。ところで
如何でせうか、まことに無様で恐れ入ります
が、貴方さまにちよつと病院まで御足勞願へ
ないでせうか」
またしても突飛なことを云ひ出す老婆の言



葉は、すぐそのまゝ私にのみこめなかつた。

私が返事につまつて黙つてゐると、私から拒絶されるのだと思つてか、老婆はしきりと私に頼み込むのであつた。

「それは、私に間に合ふことなら病院にでも行きませうが、一體どんな御用があつてのことですか」

「はい、申し遅れまして、何んともお詫びの

言葉が……それにはわけのあることで、實は恥を申さねばなりません。先日孫が自殺をはかりまして、幸か不幸か生命だけは取りとめて、只今病院に入つてをりますすが……」

急にオロ／＼聲で語る老婆の目には、はや涙が一ぱいたまつてゐた。私は老婆を公園のベンチに腰かけさせて、とに角一通りの話をきくことにした。

この老婆の名は松永ムツといひ、静岡縣焼津町で物持で知られた舊家のご隠居であつた。そして彼女には春二といふ可愛い一人の孫があつた。春二は事情があつて生れて間もなく里子にやられ、六歳といふ腕白さかり、しかも大人のいふことは何んでも理解の出来る年頃になつて親もとに歸つてきた。立派に育つた孫と一緒に暮すことになつた彼女は、ただわけもなく春二が可愛かつた。他からみても度をはづした猫可愛がりといふ所があつた。金持ちの一人息子が親の叱正もろくろく受けず、わがまゝ一杯に放縱な日を送つてゐて、それで不良化しないわけはなかつた。

年とともに春二の悪戯は種類を變へて行つた。中學の三年か四年になると、もう手のつけられぬ不良になつてゐた。喧嘩はする、酒は飲む、はては年齒のゆかぬに女遊びを覺えるまでになつてゐた。春二にとつて彼女をだます位は朝食前で、両親の心痛などはてんで眼中にないやうであつた。地方きつての舊家であるし、金持ちの一人息子といふので學校でも大目にみてゐたのかも知れないが、素行が日に荒んで末の見込みがないとなつてから、いきなり學校は春二を退學處分にしてしまつた。退學されて初めて知つたはんと春二の素行に、家人の驚きと悲嘆の様は大變なものであつた。こうして中學校を逐はれた春二は、改心するどころか、家にあつた有金を擲んで東京に出奔してしまつた。

年老いた彼女にしてみれば、如何に不良兒であつてもたつた一人の孫のことである。親たちに秘密で金を送つてやつたこともあつた。神佛に日參して孫の改心を祈つたことも

あつた。しかし東京に出た春二は、それこそ本場で磨きのかゝつた押しも押されもせぬ不良となつてゐた。ある時は警察のご厄介になつたとか、地方の新聞に書きたてられて物笑ひの種になつたこともあつた。東京での出来ごとが遠く焼津の町まで聞えてくることも一再ではなかつた。そのうち女出入の大喧嘩をやらかして、東京にもゐられなくなつてしまつた。さりとて今更親の所へ顔向けもならず、どこをどう歩き廻り、どんなことをしてゐたか判らないが、大磯で服毒自殺をはかつて打倒れてゐる春二の姿があつた。

「妾はもういつそのこと、死んでゐてくれたらと思ふことがあります。あれの倒れてゐるのを見つけ出して下さつた方がすぐに手當をなさつて、生命だけはとり止めました。」

あれがあんなふうになつたのも、妾のせいですから、せめて看護してやりたいと只今病院につきそつてゐますが、何うもあれの顔をみてゐるのが空恐ろしいのです。もう妾には神佛におすがり申すより外はありません。お

宗旨は違ひますが、今朝も増上寺様に謹らせてもらひました。そしてお説教で伺つた『因果經のお話』が大變有難く身に沁みましたので、ぜひあれに聞かせてやりたいと思ふのです。といつて妾にはとても出来ませんので、御迷惑もわきまへず貴方様に病院まできて頂いて、孫に話をして頂きたいとお願ひしたわけで御座ります。

どうか人一人助けると思召して病院まで御足勞願ひます。この通りです……」

とぎれとぎれに語り續けた彼女は遂に私に向つて掌を合せてたのむのであつた。私が病院に向向いたとて、出来さうにもない役ではあつたが、餘り熱心な姿に、うっかり承諾してしまつた。

「よく判りました。私でよかつたら病院でも何處でも行きませう。しかし今日はもう遅いですから、明朝晨朝會が終つてすぐにお立寄り致しませう」

と明日を約して彼女と分れた。あくる日も良い天氣であつた。ムツさんと

同道して私は内幸町胃腸病院に春二を訪ねて行つた。普通なら行樂の季節である五月半であるといふのに、私たちが一步病室に入つて感じた寒々とした恐ろしさは、今でも忘れることの出来ない程に深刻なものであつた。

春二の肉體は猛毒と闘ひ抜いてゐるのであらう、目はくぼみ、鼻は高くとがつて、つやのない頭髮が巾の廣い額にたれかゝつてゐた。底光りのする眼差して、いきなり私をギョロリとにらみつけ、そして寢返りうつて向ふ側に顔をそむけてしまつた。私は地獄の劫火に責め苛まれてゐる亡者の形相をみたのであつた。獄卒どもの鋒先きに追ひつめられて、絶體絶命に苦しんでゐる亡者に逢つてしまつたのであつた。

これが血の通つてゐる人間だとはとても思はれなかつた。人がこんなにも險惡なものにならうとはちよつと想像も出来ぬ程であつた。私は「とんでもない所にきてしまつた」と後悔せぬわけにゆかなかつた。私のこの氣持を察してか、ムツさんは、

「さあ、このお方がお前によいお話をして下さるために、増上寺からわざわざ来て下さったお坊さんですよ。お禮を申しなさい」

と春二にいつた。しかし春二はお禮をいふどころか煩さい奴が何しにきたかとばかりに、顔をへ向けやうとしなかつた。

私はオロオロしてゐるムッさんが氣の毒になつたので、出来るだけやさしく、無理に笑顔を作つて

「君、大變なことをしたね」

と話しかけた。すると「お坊さん」と聞いて多少は安心したのか、春二は顔をこちらに向けながら今にも絶え入りさうな低い、しやがれ聲で

「このババアが口ぐせのやうに、お前は死んだら地獄に行くぞ……とばかりいふんですよ。ねえお坊さん、僕はほんとうに地獄に行くんですか」

といった。しかしその口調は飽くまで冷笑的で、馬鹿にした風であつた。そこで私はわざと慨然たる口調でこういつた。

「無論、地獄へ行くよ。私の眼からみれば、君はもう既に地獄に行つてゐるのも同じことだ。君がもしこのまゝ死んだら地獄より他に

行くところはないよ」

「死に損つたので、地獄にも行き損つたわけ

ですわね！あハハ……」

急に大口あいて笑ひ

出した彼の顔、その聲

私は思はずゾーと悪寒を感じた。骨の髄まで

沁み通るやうな寒々とした空虚な笑ひであつ

た。私はこの機會を捉へて何んとか若者の固

く結ばれた氣持を綻してやらなくてはならぬ

と心にきめた。(未完)

鼻病に評判の良い

ビノサン療法

鼻(の)病に悩まされ今迄色々手當して居るが治らず、絶えず頭痛、頭重、鼻塞り等に苦しみ、始終鼻汁が出て頭はぼんやりし記憶力の判斷力が減退して困ると云ふ方は是非お奨めしたいのは、手間ひまいらず極めて簡単にキ、メの早いビノサン療法です。

ビノサンは從來の内服薬や洗滌等とは全く異なる一風變つた粉薬で、添付の新案吸薬器で薬を吸ひ込めば、鼻腔内深く悪い部分にまで塗布浸透され、直接病因に働きかける結果、使用一回毎にこんな汚ない鼻汁が澤山溜つて居たのが自分でも吃驚する程出て来て、鼻は氣持よく通り、頭もハツキリ軽くなつて、夜分等も氣持よく安眠出来る等快よい藥效が現はれ快癒を早めます。従つてビノサン療法は近時どこへ行つても評判です。

無代進呈

ビノサンは、信用と効果を賣つてゐる薬です。

「誰より實驗主義」で如何に良い薬であるかをお試し願ふて居ります。今迄ビノサン療法を御實驗なさ

れた方々の中には、効果を實驗の餘りそれからそれへと俗に「鼻出し薬」だ

と好意をもつて言へて下さる有様です。詳しい説明書は左記本家に

「浄土」で見たと記入御申込次第となす様に無代で急送上げます。

薬價は大量の廉價で二圓十日量、五圓(三十日量)九圓(二ヶ月量)各新

案吸薬器付(送料内地十銭海外四十

二銭です。本家の東京市浅草區藏前

三丁目五ノ八小判屋(振替東京二〇

二番)へ御注文下さい。

初^{はつ}霜^{しも}

今朝は初霜が降りた。いよいよ冬が迫つて來たといふ感じがこゝろの底にひびく。

今日は裏の畑の甘藷を掘つてもらつて、霜に痛められないやうに土を冠せたり、藁をかけてやつたりした。たゞひとりで甘藷を運び、たゞひとりで黙々として土をかけてゐる間に晩秋の日も亦黙々として暮れて行つた。

黙々として起き、黙々として働くわたくしの生活からは笑といふものは忘れられてしまつたやうだ。笑ひを持つてゐるのはたゞ人間のみである。しかし人間も孤獨の境涯に置かるゝやうになれば笑ひを忘れてしまふ。

笑ひを忘れたものの境涯ほど冷たいものはない。

吉田 絃二郎

しかしこの境涯を忍びゆくことも亦わたくしたちに恵まれた機縁を尊く生かすことになるであらう。西行も芭蕉も笑を忘れた七十年、五十年の境涯を忍び生きた。

今日も日暮れころ竹林の中で土を掘つてゐると、頭の直ぐ上の竹のいげみの中で、時についた雉子鳩が時折り羽ばたきをする。こゝにも笑ひを持たぬものゝ生活がある。年々十月の末になれば裏の竹林に來て時をもとむる雉子鳩であるが、無縁の存在ともおもはれぬ。

夜更けて風の聲に夢を破られて、そこはかなき思ひ出に耽つてゐる時、恐らく裏の竹山の雉子鳩も風に夢を破られてゐることであらう。



黙々として黄昏に思ふ時、雉子鳩も亦黙々として竹山の巢に獨り思ひつゝあるであらう。

×

わたくしは武蔵野を歩みつゝ幾度か老いたる農夫の尊い姿を見出す。かれは上海戦にたゞ一人の愛子を見失ひ、若い嫁と二人の孫を相手に、いつも黙々として野良に働いてゐる。かれは何も語らない。しかしかれはほとんど手を休めることなしに働いてゐる。老いてなほ黙々として野良に働くかれの姿は尊い。ともすれば挫けんとする弱い心に對してかれの姿は無限の力をあたへる。かれこそ生ける眞理であり、命である。

幼い子供を抱へては黙々として働きつゝある。若い母たちの姿を思ふ時、亦弱い心は勇氣をあたへられる。今は日本中に黙々として働きつゝある老父や若き母たちの姿によつて、日本中が尊くせられ、嚴肅化されてゐる。黙々として忍び、黙々として働き、生き貫いて行く人々の尊い生活によつて、日本の山も川も、村も町も尊くせられ、淨化されてゐる。

×

ことしは庭の隅の蒔柿を落して干柿にした。いつも鴉や鶉の荒らすがまゝに委せて置いたものであるが、今年は干柿にして喰べることにしたのであつた。竹の先の蒔柿を落とす、皮を剝いて四五日、裏の畑に干して置いたら、砂糖よりも甘いから干柿ができた。

その一顆を喰べながら、わたくしは今更のごとく自然の妙に驚歎しないわけにはゆかなかつた。

「蒔柿を太陽に干せば甘くなる」これは當然のことであると人は言ふであらう。しかしわたくしはその當然のことに驚かざるを得ない。

その干柿が甘ければ甘いほど、自然の妙に驚かざるを得ない。全然舌端に載すべからざる蒔柿が、わづかに太陽にあてることによつて甘露味を現出するのである。そもそも太陽の光りとは何であるか。蒔柿とは何であるか。化学者はいろいろに説明するであらう。しかし化学者の説明をこゝにもとむるのではない。こゝにわたくしがもとめてゐるのは化学以上



の説明である。

わたくしは一顆の干柿を掌に載せて縁端に坐つてゐた。日の光りが掌の上に漂うてゐた。わたくしはいろいろなことを考へた。

大盗耳四郎は念佛申すことのみによつて往生の素懷を遂げた。そこには法然上人といふ太陽の光りが大盗耳四郎をじつと照らしてゐた。

たゞ一顆の干柿であるが、この秋は自分で柿を落とし、自分で干したせいか、干柿が甘くなることが不思議でならなかつた。

×

つひこのころまで毎晩部屋の片隅に鳴いてゐた蟋蟀がばつたり鳴かなくなつた。いよいよ冬が来たのである。冬が迫ることを思ふとやゝさびしい氣もしないではないが、それだけ春が近づくのだと思ふといひやうもない明るさを見出す。

けさは庭の鶯も笛鳴きをしてゐる。笛鳴きを聴いてゐると、冬といふ感じよりも、春に近いものを感ずる。

×

今は茶の花のさかりである。鶯は茶の花の下で笛鳴きをしてゐる。霜につゝまれた庭に面して、茶を點て、笛鳴きを聴いてゐると、しみじみと靜かに生きてゐることのありがたさを感じる。

歩行がやゝ困難になり、手が不自由になつたことも、人とともに電車に乗り、人とともに往來を歩けばこそ感ずるのであつて、靜居して書を讀み、笛鳴きを聴いてゐるのでは、身の不自由も肉體の衰へも感じない。門を閉ぢ、客を謝して靜かに思惟の生活を送つた古人の心をなつかしくおもふ。

宗教といひ、哲學といひ、この心の靜かな境を除いては考へられぬ。宗教も哲學も巷に出でなければならぬ。今はすべての書齋人が巷に出て祖國の大國難に對して絶叫しなければならぬ時である。

しかし巷に出づれば名聞や慾念が湧き易い。宗教や哲學は巷を淨化し深化するために巷に出るのであるが、巷に出たために宗教や哲學が俗に還つてしまふやうなことがあつたら悲しむべきことである。



だから宗教や哲學が巷に出れば出るほど、孤獨靜觀の心の修行が必要である。わたくしたちは山門を開かなければならぬ。同時に山門を閉ぢてわれ獨り佛祖と對坐することを忘れてはならぬ。

×

庭の鶯の笛鳴きを聴きながら朝ごとに一碗の茶を喫するが、今朝こそ眞實に茶を味ふことを得たと思ふことは滅多にない。たいていは茶を喫しながら、雜念に驅られてゐる。

わづか一碗の茶であるが味ふことの困難を思ふ。あたへられた一碗の飯、一碗の番茶に對してわたくしたちはかつて充分の感恩の念を抱いたであらうか。

世間には博學と呼ばれる人も多い。頭のいゝ人も多い。しかし、しみじみと一碗の茶に心ゆくばかり靜かに語り合ふべき人はすくない。このやうな人こそまことの尊ぶべき人であるが。

×

このころは犬に與へる駄菓子といつてもほとんどない。犬は書齋にこもつてゐる主人を呼んでは硝子窓の外から食物をねだつて吠える。しかし臺所にも一片の甘藷屑もないので、わたくしは庭に下りて犬といつしよに遊ぶ。犬は既に食物のことなど忘れてしまつて、勢ひよく飛び廻る。わたくしはこの犬の心理について發見した。

「犬にとつて必要なのは食物ではない。主人のやさしい心である。」

犬は主人がいつしよに遊んでさへやれば食物のことなど忘れてゐる。

これもこのころ犬について發見したことであるが十二歳の母犬は五歳になる子犬に對して、人間と同じ愛情を持つてゐることである。

五歳の子犬だけを連れて裏の木戸から散歩に出て行くと、家に取りのこされた母犬は、一時間でも二時間でも、裏の木戸口に坐つて子犬の歸りを待つてゐる。

そして子犬が歸つて來れば、いかにもうれしさうに子犬の全身を嘗めまはす。

隨筆……

中將姫物語 ……二…

高橋良和

深窓に育ち父母の寵愛を一身にうけてゐた中將姫が、發願して當麻寺で二十一日の參籠をした。その満願の日に一人の尼僧が現はれ、「御淨土をおみせ致しませう。それにはまづ馬に百駄の蓮の莖を求めなさい」といつて姿を消してしまつた。〔前號のあらまし〕

眼前にあらはれた尼僧の言葉、

九品の教主を見奉らんと思はゞ我れその

相を現すべし、速に蓮の莖百駄を集むべしと殘して去つたものゝ、やさしい姫の力では如何ようとも出来なかつた。

百駄の蓮、淨土の如來を見奉るに必要な蓮、たとへ我が身が粉になつても集めたい。尊い佛のみ弟子として、歸依の眞の姿をあらはすべく、かたい決心が心の底にもり上つてきた。

一方に九品の淨土を夢見つゝ、現實に百駄の蓮を集めなければならぬ中將姫の心境は、佛にすがるものゝみ、いみじくもうれしい欣求淨土の試練でもあつた。

けれどもかよい女性身では如何とも出来得ない。

軍神の幼時

梅檀は双葉より芳しといはれる通り、成人して偉くなる人は決して突然偉くなつたのではなくて、矢張り幼時の頃からすぐれたところがあるものである。特に人の性質は子供の時に養はれ、それが基となることが多い。

軍神加藤少將は圓滿な人格者であり、また部下思ひの親鸞であつたことはすでに誰も知る通りである。この加藤少將がまだ小學生であつた頃、早くも美しい心の持主であつた。加藤少年と同級の友達に川上君といふ貧しい家の少年があつた。川上君は家の都合で辨當を持たずに學校にゆくことがしばしばあつた。だから他のものが楽しさうに辨當を開く晝食時間になつても、川上君獨りはすいたお腹をかゝへて淋しく我慢してゐなくてはならなかつた。

ところがある時のこと、川上君は自分の机の中に誰が入れたか大きな握り飯が入つてゐ

姫は第二番目の難關にぶつつかつて、はたと行詰つたのである。この上は我が身の力では所詮おぼつかない。貴いお方にお願ひするより道がないと知つた中將姫は、このことをお上に申上げたのである。

そこでお上では、この姫の殊勝な志をお汲み遊ばされて、近江の國に布令をお出しなされて、多くの蓮の莖を當麻の里へ運ぶべしと云ふことになつた。

五重の塔がきら／＼光る春の陽にまぶしい陽炎となつてゆらいである頂、東から西へ、南から北へ、大和三山の耳成山の麓から、そして百濟の里の雑草の間を逢ふように、車が何臺も／＼砂ほこりをたて、入陽を背にうけつゝ當麻へ、當麻へとすゝんでゐた。

「あれは一體なんだ。」

「不思議ぢやないか、當麻へはこぼれるあの蓮は何んでも中將姫とかか佛にさゝげる心のしるしとして蓮をあつめてゐるそう
な。」

村から、村へ、人から人へ、噂はやがて又

噂を生んで流れて行つた。

それにもまして姫の心はどうだつたであらう。

百獸と云ふかすも、人々の全力によつてやがてうづ高く當麻寺の境内にあつめられた。

「あゝ勿體なヤこのお心づくし。」

中將姫は手厚い尊いお方のなさけにあまえずゝも、あつめられた蓮の莖を一本づゝ折つては中から出てくる細い白い糸を手ぐりつゝ、このひとすぢに、佛への思慕をたよりに、糸まきにまきつけるのであつた。

我が身このまゝがこの一つの蓮糸によつて、佛の國に生れるしあわせ、姫は糸の一つしをまくたびごとに佛の御名を呼んでみた。

糸はきつと九品の淨土につながるといつのたよりだつたのだらう。

やがて當麻寺の哭の角にはうつくしい清水をたゝへた井戸が掘られた。

そして蓮糸は、この清水に浸して晒しあげ

られたのである。今をさかりと咲き競ふ櫻の枝に乾されたこの蓮糸は、淡い春の日ざしに

るのに氣がついた。川上君はうつかりそれを食べてしまつた。するとその翌日も、翌々日も辨當を持つてこないのに川上君の机の中に握り飯が入つてゐた。餘りのことに川上君は泣き出してしまつた。當時の擔任の堀内先生は泣き止まぬ川上君を室外に連れ出して事情を聞いて、初めてそれと知つた。堀内先生はそれとなく教室の中を廻つてみた。

堀内先生の足は加藤少年の席の前でビタリと止つた。川上君の机の中に入つてゐた握り飯と同じものを食べてゐる生徒は加藤少年より外になかつたからである。しかも加藤少年は先生に自分の仕業を知られたことに氣がつかないで晝食してゐた。先生は加藤少年を外に呼びだして質ねた。

「握り飯をやつたのはお前か」

加藤少年は目を伏せたまゝ黙つてゐた。

「さうか、わかつた。建夫、よくやつてくれたな。その心で大きくなつてくれ」

先生の目からはとめどもなく清らかな涙があふれ落ちてゐた。

風の吹くまゝにゆらいで、當麻寺は時ならぬ美しい風情を呈してゐた。

それは二十三日の夕方である。

その時のありさまを當麻曼陀羅緣起にはこう書いてゐる。

夕また一人の化女來り、藥二把を油二升に浸して灯火となし、堂の乾の角に織機を立て、戌の刻より寅の刻に及び阿彌陀淨土變一鋪一丈五尺なるを織り顯し、竹の節らきを軸として懸け奉るに、莊嚴赫奕として光明遍照せり。

と、即ちいづくからともなく、一人の天女が天下つて純白の糸をあつめ、その糸をさばいては五色に染めて機にかけ、梭の音輕々と、一夜のうちに一丈五尺を織り上げたのである。

しかもその中にあらはれた如來の姿と、九品の淨土のありさまに聲をあげんばかりによろこんだのは、中將姫ばかりではなかつた。あゝありがたや、この織物、姫ははつと氣づいてこれは何誰のお力ぞへならんと織りな

せる天女に聞いてみれば、

先の化尼は、西方極樂の教主、天女は觀世音菩薩なりと告げて西方淨土に去れり、と當麻曼陀羅緣起は述べてゐる。

中將姫の願もて天女が織りなせる一丈五尺の淨土變相の圖とはそも／＼なのであらう。

その圖相は内外二陣に分たれ、内陣には淨土教所依の經典觀無量壽經の所説によつて、西方淨土の依正二報の姿を顯し、外陣には經の序分、日想觀をはじめ十三觀それに九品の淨土の相を圖示してゐる。

この淨土變相を後に人々と呼んで當麻曼陀羅と稱したのである。

中將姫にとつては、このありがたい心境に比べて、昨年の六月この當麻寺にたづねてきたときのこと、心の中によみがへつてくるのだつた。

止むに止まれぬ佛への憧れをいだいてこの寺の大徳信雅和尚にすがつたのである。

それくらゐ固い心がけならと、信雅和尚のはからひで後本尊の前にひざまづいたのであ

つた。

ゆらくと立ちのぼる香煙の前に靜に合掌する姫の姿、葉末をゆする風に露のおちる音さへき、靜かな御堂の中で信雅和尚から嚴かに三歸戒がさづけられた。

香煙の中に十六年の長い生涯の凡惱を清めて、佛にすがる身となつた姫にとつては、全く一瞬の夢にしか思へなかつた。

一丈五尺の淨土變相圖をみ上げたとなん、ふと現實の我に心を置きかへてみた。

さんせんと光を放つ、丈餘の極樂淨土の圖相、その寶地中に突出せる舞臺上に八童子あり、左方は笛、篳篥、腰鼓の姿面白く、右方の三童子は、琵琶、鉦、笙の節美しく奏でる妙音が生命一つの底にしみこむような法悦に浸つてゐる自分だつたのである。

今までにひたむきに求めてきた永劫の道は目の前に開かれた。

十六年の長い／＼惱みはらはれて九品の淨土で妙音を聞く身となつたのである。

歌壇

岩野喜久代選



シドニイ攻撃の四勇士を讃ふ
わが海軍特別攻撃隊は先に真珠
灣に於てその高邁なる精神を發揮
して世界を驚倒させたが、今また
シドニイ攻撃に際して世を震撼せ
しむ。敵將すら感動してその屍を
をさめ厚く葬り自國海軍に範とせ
よと訓戒せりと云ふ今、慟哭の歌
をつつしみて我等ささぐ

浦和市 瀧川 信雄

うち笑みて往きし四勇士敵將に骨
ひろはれて還り來んとは

熊本縣 五野 一之

シドニイを震撼したる四勇士を敵
將讃へあつく慕る

東京府 小柳 萬

生き死にを超えて死につる艇員を
敵將すらほめ讃へけり

選者 岩野喜久代

海行かば水漬く屍と誓ひてし益良
武夫よそのごとく死ぬ

死も生もあらぬなりけり澄みとほ

る心に敵のただ中を衝く

國民の心掲げつつ哭かきめつ死に

たまひしよあたは益良夫

シドニイの青き入江になきからを

拾ひて敵の將も驚きぬ

「忠勇を日本に學べ」敵にすらか

く云はしめぬ海の四勇士

東 京 八木澤壽美男

軍神加藤少將

幾百の敵をうちしかあな惜しき益

良夫の機は海に沈みぬ

静岡縣 一向 山人

ああ無敵わが艦隊に弟の在りと

思へば血潮たかなる

東 京 梓 鞘子

大君のみことかしこみ夫子の征く

瀬路につづくこの波なれや

愛知縣 稻本 利一

股肱ぞとのらし給ひし大君にいの

ち捧げで我れは病みたれ

小樽市 中村 茂舞

田作りはたのしきことよ勝ちぬか

む種をおさめて心なごめり

東 京 上野 昌子

南海の椰子の葉陰にこの月を夫子

も仰がんつかしきかな

愛知縣 近藤 飛水

我が家の鐵類は皆捧げたり今は我

身の召しをまつのみ

北海道 花田 順往

我れと云ふわれにはあらで無量壽

の日日新しきのびる嬉しさ

北海道 柏谷 利吉

はなれてはまた相寄りて水鳥の心

のままに遊ぶ湖

富山市 新田 正治

大ハンマびたりと止みて静けさに

歸れば闇に秋の蟲なく

秋田市 妹尾馬之助

木枯しの吹く夜はいとどさびしけ

れ征きしわが子の上をおもひて

東 京 島田 照子

わが兄の召されて征くをふるさと

の老いたる母はいかに聞くらん

兵庫縣 角田 貞子

みいくさに子等をささげし老いら

くの母にな吹きそ秋の寒風

満洲國 鶴岡 慈禮

日本を汝れら知るやと片言に聞け

ば大きく子等の頷く

栃木縣 大輪 清

皇國にこの身生れて働くを嬉しき

ことに思ひけるかな

北海道 永尾 慶吉

亂れとぶあまたの蜻蛉見てあれば

南の空のいくさ思はゆ

京都市 葉山 千高

その手足み國のためにささげたる

いくさ人等の手記泣きて讀む

兵庫縣 前川 泰三

かへるべき職場は知らぬひたすら

に再起を思ふ夜半にめざめて

京都市 竹内 修吾

大詔をいただきし日そ子等は皆一

入強く大地を踏み

京都市 永田 七郎

北のはて南のはてにみいくさは進

み事なき身のはつかしき

加古川陸軍病院 鴨田 心照

寂しけれ菊の香高き大御代に白衣

をきたるわれを思へば

秋田市 小崎 蓮葉

なき父の夢を見しとて來し人と云

ふこと盡さず小夜時雨ふる

投稿規定

官製はつき一回二句以
内とし、住所氏名明記
の上、淨土編輯部歌
壇係あてに送ること



科學を越えて

學を包む行

佐藤賢順

來迎圖像や佛像彫刻の作者として、傳説的に名高い恵心僧都は、また一

といふ一條がある。私はこれを読んだ時に、何か深いものに打れた思ひがして、そこらにあるまやかしものが、ふつ飛んでしまつたやうな感動を受けた。

その後、たまたま僧都の「觀心略要集」といふ、これも代表的な著作を読んだと、

「縱ひ佛法を習ふの人有り」と雖も、若し名聞利養の爲にせば、何ぞ摩尼珠を以て、一頭の牛に博ふるに異ならんや」といふ句にぶつかつて、いよいよ感動を深くした。我が教學史上に

他を抜んで燦として光芒を放つ僧都の學問的態度といふものを偲ぶことができたのである。

學問は名譽のためにするのも利益のためにするのもない。それかといつて單なる知識的興味から、學問のために學問するのではない。すべて學問は、人生の最高目的たる無上菩提を成ずるためにするのである。もし無上菩提を眞に生じることといふ言葉で表すな

代の碩學として名高い。僧都は實に我が國の佛教文學に於いて、重要な地位を占める巨匠の一人であつて、僧都の撰述にかかる「往生要集」が日本佛教の行くべき道について、示唆するところ多かつたことは餘りにも知れ涉つた事柄である。「應に重く禁制すべき條々」を四十一條定めて、自らの日常の規矩とせられたばかりでなく、門下一同をも固く誡めて、これに従はしめられた。そして「已上四十一條は眼精の如かるべし」と言はれた。

その一つの條項に、

一、唯だ名利の爲に聖教を學ぶと雖も、必ず無上菩提に廻向せよ、

といふ一條があり、これに續いてではなく別の所にではあるが、

二、木屑の才智を以て問答論議を好むべからず、

らば、學問は眞に生きるためにするのである。學問ばかりではない。その他の人生百般の営みは、一つとして眞に生きること、即ち菩提に廻向されないものはない。かうしてすべての営みが、人間の最高の目的によつて統一せられ、それへ方向づけられる。このやうな高きを望む人にとつて、「木屑にも等しい才智」を以て、論議のために論議するやうな低調な知識主義が、問題にならないことは言ふまでもない。

行ふこと、生きることのための學問であつて、語ること、知ることのための學問ではない。眞の學問は、生きぬくことのうちに包まれてゐるでなければならぬ。生きぬくことのうちに生れてくる論が、眞の學問とならねばならない。佛教の教學といふものは、さういふ特色を持つてゐる。

明治から大正への長い知識偏重の時代が過ぎて、漸く近年になつて、知識偏重はいけな、と言はれるやうになつた。いや、もつと知識偏重であつてほしい、などといふ聲もまだ聞える。知識と生活とを切り離した考方は、ギリシヤ的傳統に根さすもので、その潮流が悟性主義の文化となつて西洋を洗つたので、我が國としては、明治以後しばらくの間のかり物であつた。

ギリシヤ的傳統の範圍内では、學問は道德や藝術や宗教とは異なる、獨立の領域を持つものとしてそれらから切り離されてゐるが、東洋

的な考方としては、一應は區別してみるが、やがて學問を突きぬけて學問以上の境地へ出てしまふ。學問は孤立した文化ではなくて、高く廣く生存に包み覆はれてその一部となつてしまふ。

僧都の片言隻句の中に表れてゐる學問論は、わが國の傳統的な考方を示すもので、それは決して學問を輕んじたり嫌つたりするのではなく、それを重んじ尚ぶこと何人にも勞らぬけれど、それに耽らず溺れず、これを越え出るので、僧都の思想に傾倒すること深かつた法然上人はまた知識に對するこの態度をも受け繼がれた。學問から入つて、「智慧第一」の譽を得られた上人は、遂に學問を生きるもののうちに包み覆ふて、しまはれて、一切を佛にお任せする「一文不知」といふ高い所にお立ちなされた。

學と行といづれを先にすべきかについて、淨土宗の第二祖鑑西の聖光上人は、次のやうに教へた。

「日ごろ學し給へる人々だにも、すべてこそ念佛申さるるに、おしき暇に念佛申さずして學文すること、はなはだしく、たとへば念佛申してそのいとまのみまあらば、機に隨つてしつべからん人、學文なんどせんは、さも便宜に似たり、念佛をばすして學文すること然るべからず。」(念佛名義集)

學文を専らにしてゐる人でさへ、遂にはそれを捨てて念佛申すのに、念佛を捨てて學文するなどは以ての外であるといふのである。詮じ詰めて言ふ時には、かうした言ひ方をしなければならなかつた

らうが、これは學問を蔑み疎じて念佛へ走るといふ意味ではない。學を突き抜けて行へと達することを教へたので、學と行と並べて、いづれを取るかといふことになれば、いま述べたやうな表現になるのである。

かうした學問に對する態度は、廣く日本佛教を貫く態度である。

それを例示するために道元禪師の言葉を引かう。

「吾が心にも亦本より習ひ來たる法門の思量をば棄てて、只今見る所の言語行履に次第に心を移しもてゆくなり。かくの如くすれば、智慧もすすみ悟りも開くるなり。本より學せし所の敎家文字の功もすつべき道理あらば棄てて今の義につきて見るべきなり。法門を學することは本より出離得道の爲なり。我が所學多年の功つめり。なんぞたやすく捨てんと猶こころ深く思ふ、即ちこの心を生死繫縛の心といふなり。能々思量すべし。」(正法眼藏隨聞記)

これは最も優れた學問論の一つではないか。多年學んだ所の學問であつても、それが今の場合に役に立たず、捨てるべきであれば捨てねばならぬ。現在を中心として學問を取り上げてゆかねばならぬ、といふのであるから、既往の觀念に把はれない最も自由な生きた學問の考方である。ここには學問を輕んずるところか、却つて歪曲されない眞の學問の發展を促す公正な態度さへ窺はれる。然し「法門を學することは本より出離得道の爲」であるから、すべてはこの目的へ向つて統一せられねばならない。そのために必要とあら

ば、學問は超え出でられねばならない。大方は折角多年學んだのであるからとて、容易にこれを抜け出でることができないものであるが、このやうな執着こそ生死繫縛の心といふのだと諷められた。

學問を、惠心僧都は無上菩提に廻向するためであると言ひ、道元禪師は出離得道のためであると言ふ。全く同じことである。行が學を包むのであつて、これが學問に對する我が國の傳統的な考方である。従つて我が國獨特の學問の方法がここから生れるのが當然であつて、それは西歐の知識主義的な方法とは異なるもので、體得されることから生まれる「主體性の論理」とでも言ふべき方法である。

「科學する心」といふことが合言葉のやうに唱へられてゐる。然し「科學する心」とは精神を排除するやうな低俗な唯物的な態度であつてはならないことは言ふまでもない。それは高邁な科學的精神である。人もまた鳥のやうに空を飛びたい、といふ空想が、現在の航空科學の母胎であつたことを思へば、科學的精神と空想とが甚だ接近し合ふものであることが考へられる。現代は科學的技術は頗る普及し發達してゐるが、その反面、科學的精神は忘れられつつある、などといふ聲を聞くことがあるが、誠に心すべきことである。

その科學的技術でさへも、生活のただの表面に表れてくる技能、その場その場で外界に適應してゆくために知覺的な働きから生れてくる眼先き手先の技能ではなく、構想力といふ深い働きに基くもの

であるときれてゐる。

してみると、「科學する心」は所謂科學を突き抜けるところに本来の面目があるのではないか。我が國の科學の受取り方は、學科を尊重しこの發達に専心努力すると共に、そこに停頓せず、それを唯一のもの終局のものとせず、それを包む一層高い立場から、それを縱横に驅使してその本領を發揮させるといふ我が國の獨特の受取り方であつた。科學に入つてこれを抜け出でることによつて科學を驅使するのである。

ソロモン海戰記を讀むと、魚雷の發射係が白鉢巻の姿甲斐斐しく發射管に取りついて、魚雷に合掌して、「きつと當つてくれよ」と生きた者に物言ふ如く言ひ聞かせる一節がある。科學する心がもし低俗な科學至上主義であるならば、この嚴肅な瞬間を何と説明するであらう。

パレンバンを奇襲した落下傘部隊の徳永中尉の手記によると、奇襲の前夜は隊員達は落下傘の點檢に餘念がなかつた、くどいほど入念に何度も何度も傘を點檢してゐた。

「眠られぬ夜が明けて基地を飛び立つた編隊が、堂々〇〇機の梯形陣をつくつて一路パレンバンめざすその機上でも、部下たちはまだ落下傘の點檢を止めなかつた。私は自分の落下傘から成田山のお守りをはづして『開くぞ、必ず開くぞ』といひながら一人一人の傘をお守りで撫でてやつた。私がお守りを持つて前に立つと、部下は兩

手で傘を押し戴いた。そして顔を上げると、安心したやうに私を見て笑つた。私も笑つた。(讀賣)

何といふ嚴肅な情景であらう。

奇襲の前夜、基地で落下傘を一つ一つきちんと疊んで齋壇の如く積み重ねて安置して、七五三繩を張り神酒などを供へて、隊員一同がその前に額いてゐる寫眞が雑誌に出てゐた。(航空本部提供) あれといひこれといひこの世に於いてこれほど嚴肅な情景が又とあらうか。行き着く所まで行き着いた情景である。泣くのと笑ふのとが一つになつた情景である。その前には如何なる多辯も沈黙せざるを居ないであらう。息の詰る瞬間である。

科學偏重主義の人はこれを何と説明するであらう。もし合理的だけで事足りるならば、開くにきまつてゐる落下傘を幾度も點檢する要はないことにならうし、ましてお守りで落下傘を撫でるなどといふことは、全く解しかねる行爲だと言ふであらう。科學至上主義は人間が全我を投げ込んだ刹那を理解することができない。それのみならずかやうな情景を冷酷に輕蔑するやうな結果になる。

宗教を、科學や道徳や藝術と對立させることなく、日本的に科學や道徳や藝術の一切を包む究極の境地を表す言葉とするならば、宗教は全我的振動と振幅を同じうするものであつて、科學を超え出でるとは、科學からかやうな意味の宗教に入ることであつて、そこから廣く人生と世界を見直すことに外ならない。(西ヶ谷雜記の二)



銃後
美談

美しき遺書

代田重雄

かけた。その聲は力なく細かつた。

「學校が遅れるといけないから、お茶碗は
そうして置きなさい、お茶碗くらゐならお
母ちゃんだつてあとで起きて洗へるから：

「大丈夫、お母ちゃん、まだ十五分あるよ」

和夫は元氣にかう言つて、やがて急いで
お茶碗を洗ひ、そこらをかたづけるとお勝
手から千代のそばへやつて來た。

「和夫、上着の二番目のボタンがとれてる
よ、失くしちやつたの？」

「うん、僕持つてるよ」

「ぢや、こゝへお出し、お母ちゃんつけてあ
げるから」

「いゝよお母ちゃん、無理しなくても、こん

なもののくらの僕だつてつけられるさ」

和夫は針箱から針と糸を出して、ズボンの
ポケットに大事そうにしまつておいたボタン
をさがし出して縫ひ始めた。造作ないことで
も九つの子供には無理なところがあつた。千
代はその健氣な小さい姿をデツと見つめ、こ
み上げて來る泪をソツとかくした。

川崎市南小田町二丁目——番地戸田啓太郎
さんは、昭和——年——月——日名譽の召集
をうけ、矢ヶ崎部隊に屬し、曾て南京晴れの
入城式に参加した勇士であつた。其後一度歸
還の恩命に浴し、召集前勤めてゐた日本鋼管
會社の一産業戦士として働いてゐるうち、昭
和——年暮ふたゝび名譽の召集令が下つて出
征目下北支方面にあつて各地を轉戦、赫々た

學校へ行く子供達や、魚屋や八百屋へなら
びに行く買ひ出し部隊で、この横町も朝の一
しきりはうるさいほど賑やかである。

「和夫」

勝手元で朝飯のすんだあとの茶碗をカチャ
／＼と洗つてゐる和夫に向つて、千代は聲を

る武勳を立てつゝあつた。

ところがこの春以來妻の千代さんは病弱の身となり、長男の和夫を抱へ生活をつゞけて來たが病勢はますます悪化の一路を辿り、夏頃からつひに腎臓病を併發して、三十といふ若いみそらを病床に呻吟する身となつた。

しかし萬が一にも、自分の病氣のことを戦地の夫に知らせやうものなら、夫は家庭の事を心配し、御奉公に差つかへるやうな事になつては申譯がないと、今日までひた隠しに隠して來たのであつた。

「名譽の軍人家族だ、戸田さんの家は吾々の手でお世話しよう」

期せずしてかうした聲が隣組を初めとして、町内のあちこちから起つた。あたゝかい人達の心づか

ひも出征軍人といふ輝やかしい譽れの片書があつてこそ、一しほ強いものがあつた。千代

としてもそれに甘へるわけではなかつたが、病床に伏してゐる現在ではどうしようもなか



つた。千代の一家に援護をしてゐる人のうちでも、町内の世話役の金子松五郎さんは、親

身すら及ばぬ世話ぶりであつた。

「只今——」

「あら、和夫、相變らず早かつたね？」

「うん、だつて魚屋のおぢさん、和坊居ねえかつていつも大きな聲で怒鳴つて、僕だけに

「一番先に賣つて呉れるんだよ」

和夫はかう言つて新聞紙に包んだ魚の切身を其處へ置いた。

「でも、親切なおぢさんね」

千代は朴直でなんのかざり氣もないあから顔の魚源の源さんの顔を思ひ出し、いつもながらかう言つて感謝の氣持でいつぱいになつた。

今日もそうであつた。

魚源の店の前にながつゝゐた女の人達の間に入つて、和夫は自分の番の來るのを待つてゐた。源さんは店をあけるとすぐ往來へ飛び出して、一番先の列のそばから後の方に向つて大きな聲で怒鳴つた。

「オーイ、和坊居ねえか、和坊——」だが和夫は顔を赤くして小さくなつてゐた。

「和坊居ねえかつてんだ？」

源さんは心持ムキになつて怒鳴つた。

「和ちゃん、早く返事してお出でよ」近所の

おばさんが、そばからかう言つた。だが、和夫はいつものことで、いくら出征軍人の家だからといつて、いつも自分ひとりに買つてしまふのはわるいやうな氣がした。

「なアんだ、和坊こんなところに居たくせになぜ早く返事しねんだよ。さア／＼おめえはいの一番だ、誰が文句言ふ奴がある」

源さんは和夫の手をぐん／＼と引ッ張つて行つて、そして、もぢ／＼してゐる和夫の手に一番先に魚を握らせた。

町内の人達の千代の家に對する思ひ遣りはざつとこんな鹽梅である。

「和坊、學校は？」

町内の金子松五郎さんは、和夫の姿を入口に見てかう言ひながら入つて來た。

「僕今日から遅番です」和夫は小田國民學校の二年生である。

「そうか」と、松五郎さんは一寸考えてか

ら、和坊、家にな、獲りたての茄子に木瓜があるからおちさんが言つたツて貰つて來な、

それから、お千代さん、おいしいお米を少しばかり持つて來た」

松五郎さんは、お米の入つた風呂敷包みを其處へ置いた。

「度々有難うございます、お世話さまにばかりなつて、本當にすみませんです」

咽喉元からこみ上げて來る感謝の泪を、千代はデツとおさへながら言つた。

「お千代さん、そんなお禮の言葉はいゝ加減にやめてもらいたいね、隣組の歌の文句ぢやないが、助けられたり、助けたりツてね、こりや鉢後の義務でものだ」

松五郎さんは冗談まじりにかう言つて、そして、フトそばの茶籠の前に置いてある藥壺の空になつてゐるのに氣がついた。茶籠の上の柱にかけてある柱簾は明日の日曜日

を知らせる青い文字の二十八日、もう月末である。

「藥を貰つて來よう、早く藥をどし／＼服ん

で癒つてもらはないと困る……」

松五郎さんは手を伸して藥壺を取つた。千代は頭をもたげあわてゝそれを制すやうに、

「いゝえ、和夫が來たら貰ひにやります、そんなことまでして頂いては……」

「なアに、造作ないことだ、それに和坊ぢや分らないこともあるだらうから？」

松五郎さんはもう玄關の戸に手をかけてゐた。松五郎さんの出て行くうしろ姿を見つめ、千代は一時に湧たとして流れ出る泪をどろしやうもなかつた。

啼きおとろへた法師蟬の聲にも、秋の氣配が感じられる。

「おちさん——」

家の裏の空地の畑で、秋蒔き大根のサクを切つてゐた松五郎さんは手を止め、その聲の方を振返つた。

「なアんだ、和坊か、だしぬけに、何か用か？」

「うん、用ぢやないけど……」
「まあいゝや、どれ、和坊がせつかく來たん

だから少し休むかな」

松五郎さんは縁側に腰を卸すとたばこに火をつけた。

「おちさん、これ讀める？」

働いた後のたばこのうまさに酔つて陶然としてゐる松五郎さんに向つて、和夫は突然にかう言つた。そして、和夫の手から出す手紙のやうなものを、松五郎さんは受取つた。

「なんだい、こりや、あれ、手紙ぢやないか、和坊は何處からこんなもの持つて來た？」

「お母ちゃんの下にあつたんだよ」

「ふん？」

松五郎さんはその手紙を何んの氣なしに開いて、讀み初めた。

金子の旦那さま隣組の皆様また親戚の皆様

皆々様のかづ／＼の言葉には言ひあらわせずぬお情けにより千代はこれまで生きながらへて参りました、せつかく皆々様の深いお慈悲があるにもかゝらず神や佛に見捨てられませんでしたか私の病氣はなほりません、私は何事も今日までの約束と思ひあきらめま

す、しかし私はたゞ和夫の行先のことを思ふと胸がはりさけるやうです、萬一にも私が亡き後は親戚の皆様何卒小さい和夫のことをお願ひ申します今日まで守り育て、参りましたがもうこれが最期です母に捨てられた哀れな和夫をどうぞ願ひ申しますそれから千代がもし死んでも戦地の夫には必ずこの事は知らせずにて下さい。もし夫の御奉公に差つかへるやうなことがありましては一大事です軍人の妻として夫の萬一の場合の事は覺悟いたしてをりましたがその夫に先立ち生きて夫を迎へることも出来なかつた千代の身をどうぞ不憫と思召しどうぞ私の死は夫へ知らせないで下さい、これが死にゆく私の一生のお願ひです、親戚の皆様、和夫の事は呉々もお願ひ申します、では皆々様

永い間種々お世話になりました千代は厚くお禮を申し上げます

いつ死ぬとも分らぬ萬一の時にそなへて

千代

金子の旦那様

隣組の皆様

親戚の皆様

それは哀切胸をやくやうな千代の遺書であつた。短い文面ではあるか言々句々、泪無しでは讀み得ぬ、千代の哀しい心によつて綴ら

肺・肋膜・胃腸病者へ御知らせ

信仰を別として療養中一番頼りとするものは醫藥です。ところが藥の選擇となると中々信用出来るものが見當らないのが現状です。今度發賣の最高級強力消化藥養劑『テモテ散』は肺・肋膜・胃腸疾患の治療及豫防に驚くべき効果をあげ、七里ヶ濱保養院で臨床實驗の結果體重増加恢復率九五パーセントの偉力を示したものであります。

呼吸器疾患・急性性胃腸カタル・消化不良異常酸酵・常習便秘・胃弱・胃酸過多症・肋膜等で治らぬもの肥れぬものとあきらめた人・家庭の事情で入院出来ない人も是非一度試みて下さい。自宅で信用ある病院藥が服用出来ます。冊日分拾圓ですが療養者に限り奉仕價送料共八圓で御頒け致します。萬一不適應の時に御返金致しますから安心して御手数でも直接製造元へ振替か小爲替で御註文下さい。宛名は鎌倉市七里ヶ濱二番地七里ヶ濱保養院振替機演五五八二

肺・肋膜・胃腸病者へ御知らせ

肺・肋膜・胃腸病者へ御知らせ

肺・肋膜・胃腸病者へ御知らせ

肺・肋膜・胃腸病者へ御知らせ

肺・肋膜・胃腸病者へ御知らせ

肺・肋膜・胃腸病者へ御知らせ

肺・肋膜・胃腸病者へ御知らせ

肺・肋膜・胃腸病者へ御知らせ

肺・肋膜・胃腸病者へ御知らせ

肺・肋膜・胃腸病者へ御知らせ

肺・肋膜・胃腸病者へ御知らせ

肺・肋膜・胃腸病者へ御知らせ

れたものであった。千代はかねてから死を覺悟し、萬一の場合にそなへて、ひそかに書遺してゐたのである。

讀み終つた松五郎さんの兩眼は泪にいつばいだつた。松五郎さんは千代の見上げるやうな立派な心に打たれ、しばしデツと泪の眼をつぶつて、千代の心を思ひ遣つてゐた。

「和坊、おぢさんにやつと讀めたよ、これはな、戦地のお前のお父さんに見せる大事な手紙なんだよ、おぢさんが後でお母ちゃんに返してやるから置いて行きな、……それから和坊、お母ちゃんには黙つてゐるんだよ。分つたな？」

「うん、僕、黙つてゐるよ」

和夫は素直にかう言つて、もうその手紙のことも忘れてしまつたらしく、元氣に表の方へ駆けて行つた。

「こりや驚いた、お千代さんお前さんのそうした姿を幾月ぶりで見るとだらう？」

それから二十日ばかり過ぎたある日――

十年だかりの庭を野菜畑にしたその中に立つて、幾月ぶり伸びるがまゝにまかせてあつた雜草を取り除けてゐる千代の姿を見つて、松五郎さんは近所へひびくやうな大聲で言つた。千代はうれしそうにニツコリと笑つて、雜草の中から出て來た。

鉢後のあたゝかい心遣りに、一時は死とまで考えつゞけて來た千代の病ひは、悪いものを拭ひ去るやうに、さつぱりと全快した。久しぶりに病床を離れた千代は、初めて、今日、秋晴れの明るい爽やかな陽のこぼれる庭に出て、雜草を取り除けながら、この十坪しかない菜園に播種のことなどを、楽しく考へてゐた。

「お千代さん、早く癒つて本當によかつたね、和坊も、どんなに喜んでゐるだらう、わしだつてうれしうよ」

「皆さんのお蔭です、どう言つてお禮を申上げていゝやら、私にはわかりません……」

千代は、病み上りの白く、細くなつた指を見つめながら言つた。

「今日はお千代さん、お前さんにお返し、なければならぬ物があるんだ、これだ？」

松五郎さんはかう言つて、ふところから大事そうに出したものを、千代の座つてゐる縁側へ置いた。

「この前、和坊が持つて來たんだよ、子供は何も知らない、おぢさん讀めるかいと言ふから、どれ見せな、と言つて開いて讀んでみると、この手紙、いや、お前さんのこの遺書なんだ、その時に和坊に持つて歸させやうと思つたのだが、ねお千代さん、よけいなおせつかいかも知れないが、萬一の時に、お前さんの軍人の妻としてこの立派な意志は、わしが代つてお傳へしようと思つて、實は今日まで誰にも話さず、ソツとあづかつてゐました……」

千代はハツとして、萬一の時にと、自分がひそかに書き遺しておいた遺書をふたゝび目の前に見て、あの時の哀しい氣持が、潮のやうに胸の中に返つて來た。

千代は次第に全快に向ふにつれ、絶望の、

微かながら細々とともつてゐた灯が、急に明るく、バツと大きな光となつて前途に希望を



見出したやうに、限らない喜びのうち
に、自然、そうした遺書のこと忘れ
てしまつてゐたのであつた。

千代は今更のやうにその遺書を読んだ。
今にして思へば、そうした事は自分にはかゝはりのない、遠い日の出来事
のやうにも思はれて來るのであつた。そして千代はしみ／＼と、現在の幸福感にしたつてゐた。

「よかつたよ、この遺書が役に立たずに
すんで、わし達もこれで本當に、戦地にゐる啓太郎さんに鼻高々と顔向け
が出来るといふもんだ……」

「何も彼も、本當に皆さんのお蔭です
もの、でも、こんなまでお見せし
ちまつて、ほんとに氣まりがわるいや
うです」

「氣まりがわるいどころが、お前さんの立派な心かけに、あの時わしや泣かされた、そして、どうかこの遺書が無駄にな
るやうにと思つた、お千代さん、この遺書は

無駄になつたが、お前さんの命は無駄にならずにすんだ、生きて立派に啓太郎さんを迎へることが出来るぢやないか、本當によかつたね、戦地の啓太郎さんは何も知らずに、大陸の何處かで、今日も勇ましく働いてござるだらう……あゝ、わし達もこれできれいさつぱりと、重荷が下りたやうだ、やれ／＼」

松五郎さんはしみ／＼とかう言つて、千代の顔をのぞき込んだ。
畑の垣根のそばに咲く鶏頭花を見つめながら、千代は明るい氣持で、松五郎さんの言葉に應へるやうにニツコリと笑つた。

(齋藤 清 畫)

特志寄附者芳名

本會に左記の通り特志寄附下されました。

金一圓二十錢

川崎市渡田新町三九九

内 田 か ね 子

隨筆子の供の躰(下)

石井俊瑞

第二には、幼少の時から國に對する養方を怠つてはならぬことである。これは少し變な言ひ廻しではあるが、要するに國家國體に對する道德意識を強く植えつけることであつて、子供を躰ける抑々根本的なことなのである。私は二十數年の間、常に過つて國法を犯した人達に「國に對してどう考へてゐるか」と云ふ問を出して所感を書いてもらつてゐるが、殆んど例外なく國の有難さを知り、國に迷惑を掛けたことを詫びておる。

然し私が茲に言ふのは、そんな知識として知るだけでは何の役にも立たないので、日常の一舉手一投足が自然に國に奉ずる心根から出たものになつておらなければならぬと言ふことなのである。あゝ言ふ人達は何れも國を知りながら私利私慾に驅られた奴隷であつたのである。即ち個人主義、自由主義の權化であつたので、全體に奉ずるの念に缺けてゐた。よく道法精神の昂揚とか養成とか、法科系統の人達は口にするが私はその以前に、否、その

基本に國家國體に對する道德意識の涵養と言ふことが大切であつて道法はその自然の流れであると考えておる。道法と云ふことに、こたわつてゐると極めて末梢的になつて服法とか合法不徳の行ひが生ずるとも限らぬ。

さて而らばそう云ふ國に對する道德意識を植えつける躰はどうするか、やはり宗教的敬虔と宗教的情熱の啓發培養を基として不斷に目を通し耳を通じて知らしめ感ぜしめ、そうして行はしめなければならぬのである。それには勿論大人自身國に對する奉公の心構へが出来ておらなければならぬ。

畏くも陛下は現人神にあらせられ我々は神の子であつて常に神意に従つて奉公すべき者であると言ふ最後の心構へが出来ておらぬといかぬ。閣取引のことが子供の面前で平氣で行はれたり、又特殊な地位階級にあるによつて特別の配給のあることを如何にも當然であるかのやうに寧ろ誇り顔に語られておるやうでは駄目では

ある。さきに私は國に奉ずるの心、私を滅し全體に捧げる心と言つたが、勿論それも子供の年齢に應じてそれ〴〵形を變へられる筈である。私利を減すると云つても所有觀念を漠然たるものにして丁つてはならぬ。他人のものを使つたり無くしても一向心に深く咎めない様になつてはお終ひである。又自ら立つと云ふ獨立自尊の念が薄くなるやうではいかぬ。要するにこの國に對する奉公の心は高度のものであつて、個人修養、社會道德乃至家の道德の上に位するものである。が然し、その基本となり温床となる觀念は確つかりと子供時分の心の奥底に築き上げられておらなければならぬのである。

それは義である。國體の尊嚴なることに對する確つかりした心根が幼少の頃からちあと植えられて居ることが必要である。國史物語は一つそのそれへの道筋である。従つて英雄偉人聖人傳も機に應じ、時に従つて聞かしたり讀ましたりすることは望ましい。

勿論私が茲に云ふのは歐西の人をとるのではない。尙この大東亞戰爭下、出征見送り遺骨のお迎ひなどがあり、又勤勞とか奉仕作業とか、現在行はれて居る戦時關係の事柄には、出来る限り子供を關與せしめ又見聞かすがよい。何よりも良い國の爲への心の義である。私はよく左翼思想を抱くやうになつた人達の少年期或は、青年期頃、即ち目を社會に向け、何等かの社會觀世界觀を持ち始める頃はと言へば、丁度國際主義が世界を風靡し、やれ不戦

條約だ、國際聯盟だと猶も杓子も騒いでゐた時である。家での親の義はと云へば「いや子供の望むやうに徹するまゝに……」といかにも世の識者らしく言ふ親の許に育つた人達である。反國家的思想に陥つたのは一面無理からぬ自然の道筋であつたとも言へる。之れを考へると私達お互は實に良い時代に廻り合せ子供を育てる幸運を授かつたものである。語ることも要らぬ、實際に目を通し、さうして行はしめる絶好の機會を而も潤澤に與へられて居るのである。それこそこれを一層有利化して子供に立派な國民としての自覺と素地を備へしめるやうに躰ねばならぬ、それにはどこまでも大人が行つて見せなければ何の役にも立たぬ。私は毎でも罪を犯した人を調べながら感ずる事であるが、二十數年調べた人達の中で一人として善い悪いの理屈を辨へない人はなかつたのである。それにも拘らず行ふことは反國家的反道德的のことである。一つ最近の例をとつて見る。

三十六歳の男、故實の罪を犯した、性格は偏執性人格の人だ。國家に對する考へ、親に對する考へ、その他種々の道德的な事項について書いておる所又直接面談したところでは、極めてよく正邪善惡を辨へ詫びるべき點感謝すべきこと一切合計十二分に知りぬいて居る。而もその人の今までの生活態度及び刑務所での日々行ひを見るとまるで反對である。勿論之の性質も幼少時の家庭に於ける父親の表裏ある言動を常に見て居たこと、又その最も親

しくなつてゐた叔父なる人が矢張故買で前科であつたと言ふことなど、とにかく育つ時分の環境がどうも表裏のある生活環境であつたことが、その他の點からも充分に確認せられる。そんなこんなが累つて利己に偏執する性格を築き上げて行つたものと診査された。國の有難さ尊さを知り、又盡すべきことを辨へながらその人の行ひは常に反對の軌道を走つて居る状態である。實に恐しいと云へば恐ろしいものだ。

子供を養ける親は斷じて言葉と行ひとに食ひ違ひ、表裏があつてはならぬ。寧ろ言葉より行つて見せねばならぬ。殊に國に奉ずるの性は大人の嚴肅なる又眞摯は行ひから初められなければならない。

さて第三には、本能の發展する時期をよく考へてそれぞれの養をするのである。

本能は生れながら有つて來てをる一つの傾性であつて人には一般のものがある。ところでこの本能はどれもこれも生れると同時に芽を出し發展するものではない。身體の發育に伴ひ心の發達に連れてそれぞれ次々へと展開して來るのである。而も本能は、そのどれかが芽を出し發展しやうとする時、丁度巡り遭ふやうになつた印象は極めて強く結び合つて了ふものである。之れを本能の早期特化性と普通言つておるが、とにかく一定の本能が度々加へられるとその本能は特殊な形となつて固定して了ふ性質をもつ

ておこるのである。それと反對に本能は芽を出し發展しやうとする時に特別に育てられず伸ばされないと、それきり無くなつて了ふ性質をもつてゐるのである。之れを一時性と呼んでおる。尚本能と言つても發展させて良いのもあれば悪いのもある。そこが前にも述べたやうに植木屋や百姓のやうに伸ばす枝摘む芽それぞれ心せねばならぬので養の重要さがそこにあるわけである。

そこで各本能について實例を挙げ述べるとなればそれこそ幾回にも分けて參考に資し得られるが折を見てのことにして一二の例を基にして養方を考へやう。二十一歳の或る性犯の男、殆んど變態性に近い程の者である。よく診査したが遺傳的に何等の障礙もない。又現在の生活環境にもとり立てゝ云ふ程の強い誘引もない。處がその生育史を辿つて性本能の發展する年齢期の環境が極めてその性本能の展開を強く特化せしめた事が判つた。それはその男が大工の小僧であり兄弟友達の話、それへ使ひ歩き等、とにかく性本能の芽生へをぐんぐんその方へ許り伸ばして行つたものである。もうさうなると悪いと言ふ觀念や知ることだけでは中々抑へられない。行ひが先きになつて了ふのである。こゝで吾々はよく考へなければならぬ。フロイドと言ふ精神分析學者が「リビドー」説を立てておるが、人の精神生活に於てはエネルギーは一方にのみ集中するものである。家庭を作らない獨身者は何かしらん他にそれに代るべき活動の部面をもち勢力を集中するものであ

る。大事業大活躍をなさんとし、又なすところの人はそれに「リビドー」の對象を求めて居るのである。

そこで前に戻るが上の如き本能を展開する年齢期の者には努めて「リビドー」の對象を他に轉ぜしめる必要がある。運動然り、勉強而りである。閑があることは好ましくない。私は色々、の點から大學の豫科専門學校等の訓育についても考ふべき點が多々あると考へておる。現にその結果が司法の手許へ陥ると云ふ不幸を招いておる。何れにしても國民學校上級學年頃から理解あり而も細かい注意のある曠が極めて肝要である。更に又自當本能の活躍する年齢期に於ける曠も大切な事である。之の時分の曠方が悪いと前に挙げた人のやうな偏執性々格の者を作るし、又放任し我儘にしておけば放逸な發揚性々格者を作り出して来る。偏食するのも可愛い子供だと放つて置いてはならぬ。營養によいと思つて作つた食物ならば食べるまで何も他に與へずに空腹におらすがよい。自恣放縱はとんだ性質を作つて了ふのだ。と言つて、自我の芽生えを常にむしり取つてはならぬ。情意纖弱な性格を作るし又甚だしくなると積極性のない揮發的意志力の缺けた懦弱性々格者を作り上げて了ふ。そこで問題は父の嚴と母の寛とが織り混ぜられることである。一方に自恣を誡め他方に自我を育てて行くのである。片親なれば一人二役でよい。よく世間では片親の子ではと言ふが私は斷じてさう

思はない。私の調べておる限り家庭全體の生活態度であり子供に對する態度であると言ひ度い。實例は幾らでもあるが今回はこの位にしてとめておく。(筆者は大正大學教授、心理學專攻)

何れは國の中

秀吉は鶴を大切に飼つてゐたがある時のことこの鶴が籠から逃げてしまつた。側近の家は大いに心配し、何うなることかと憂へたが仕方がないので、恐る恐る秀吉に報告した。すると秀吉は

「その鶴は異國に逃げるであらうか」と尋ねた。家臣が答へて「何分にも飼鳥のことでごさるますので、そんな遠方には逃げるやうなことがあるとは思はれません」と云へば秀吉は「それなら放つておけばよい。何れは日本の國の中にあるのである。それでよいではないか」と別にとがめもしなかつた。

楚の恭王が狩りに出て大切な弓を失つた。左右のものがすぐ探しに出掛けようとするのをとめて「楚の王の失つた弓は、やはり楚の人が拾ふであらう。損得はない。探すには及ばぬ」といひ、それを遮つた。

この恭王の言葉を後で孔子が聞き、これを評していふには、「おいしいことには料見が小さい。自分の失つた弓は後で楚の人が拾ふからよいといふのでは未だ十分でない。それを、人が失つた弓はいづれ他の人が拾ふまでとあつて損得はないと、恭王が云へばよいのであつて、楚だけに限る必要はない」と。

秀吉は鶴を失ひ、恭王は弓を失つた。ともにその心が相似て符節を合したやうである。



童話 おひがん

貴 司 悦 子

「あらん、ありがたい佛さまのお國、西方淨土に華がふりしきつてゐるのが見えるよ。ふだんよいことをしてゐる子供には見えるのだよ。」

といふお話を宗太たちになさつたのです。

宗太は今までたれからもそんな不思議なお話をきいたことがありません。

(お空から花がふつてくる)

(ほんとうかしらん?)

いくら考へてもわからないことでした。院主さんのまじめな顔を思ひ出すと何やらだんだん不思議なことがほんとうにおこるやうな気がしてきます。

(西方淨土……)

宗太はいつか本咲さんの坊ちゃんに見せて

もらつた眼のさめるやうなきれいなおとぎばなしの繪本のことを考へてゐました。その繪が頭一ぱいにかんできて、西方淨土、西方淨土といつも宗太にいつてゐるやうな氣がするのです。

「あれみたいなのところだらうな」

宗太は不思議なところといへばそれしか知らないのです、すつかりとさう思ひこんでゐました。

それで今日まで三日間、宗太は秋のお祭りも、春の山行きよりも、どんなに「おひがんさん」が待ちどほしかつたかしれませんが、鎌を置いて草から顔をあげると、も一度お日さまを見ます。たのしみで一ぱいです。

「あのお日さままだぞー!」
と空を見上げます。トンボが一匹ゆつくりと飛んで行きました。
この前の日曜日にお寺の日曜學校で院主さんは
「お彼岸のお中日に、入日をちつとみつめて

と思はず口笛を吹きます。立ちあがると遠くの本咲さんの大きな門に旗がゆれてゐます。宗太は自分の心の中にも旗が立つてゐるやうで、うれしくて心が旗のやうにゆれをどるのです。

二

小晝（お八つ）に大きいばた餅を二つ食べてお腹が大きくなると、宗太はもう雑魚取りや、穂なげをして遊んでゐられなくなりました。お日さまがどん／＼西の方へ走つてゆくやうな氣がして心配なのです。

「杉山へいかうよ！」

源ちゃん、春ちゃんをさそつてみました。

「あーんなどこ、いやだなあ。」

二人ともフナを追ふのに夢中になつて顔もあげません。宗太は仕方なく一人で杉山へ出かけることにしました。

短い竹の棒を拾ふと、勇ましい足どりでトツと坂を登つてゆきました。



丘の上に立つと、宗太の村やよその村や、ひろ／＼とひろがった黄色い田をとび越え

て、日が沈むあたりの山々が、まるで手のとどくやうに近くに見えてゐます。

「バンザイ！」

宗太は山に挨拶をしました。空を見あげると、さつきはあんなに西のお山に近づいたやうに思つたお日さまは、こゝではまだ／＼高いお空のまん中あたりであた／＼かさうに光つてゐるのです。

「なんだ、ずる／＼早くつたんだな。」

宗太は早速葛のつるで綱引きをはじめました。茂つた葉がザワ／＼ゆれると、葉のかけから蛾が三匹ヒラヒラととびたちました。

「エイツ！」

宗太は竹の棒で打ちすへました。

「毒蝶々メ、エイツ！」

體をひねると大へんな勢ひで棒を振りましたが、蛾は三四とも集つたり離れたり、のんきさうに別な茂みの中へもぐりこんでしまいました。もうあといくら「エイツ、エイツ」

とあたりの葛の葉をたゝいても何も出てきません。

「尋ね々はにげましたア。」

さういひながらいそいで小石を拾ひ集めて兩手に持つと、

「五十メートル、打て！」

と蛾のにげこんだ茂みのあたりにバラ／＼と投げつけました。蛾は茂みからとび出すと高く舞ひあがつて杉の木立の中へとんでいつてしまひました。

宗太は今度はかけ走りです。

「特急列車燕號、シユツシユツボツボシユツシユツボツボ」

兩手を忙しさに動かすと用水池のそばまで走つて、くるりところちらへ向きかはりました。

「ブーン」

手を前につき出したまゝで飛んで歸つてきました。飛行機のつもりです。それにもあきると、牛若丸の眞似もしてみました。杉の幹を、ボンとたゝいて飛ひあがるのです。

宗太はもう丘へ登つてから二時間も遊んだやうな氣がしました。もうよい時分と空を見上げました。ところが今日のお日様はどうしたのでせうか。やつぱりさつきと同じやうなところであつたかさうに光つてゐるのでした。

「あゝあ。」

一人で遊ぶとどうしてなか／＼日が暮れないのでせう。宗太はすつかり待ちくたびれてしまひました。葛の茂みのそばに横たふてある干草の山の上に登ると疲れたやうにドツカリと腰かけてしまひました。

「トントコ、トントン、トウン、トウン……トントコ、トントン、トウン、トウン……」

と靜かに唄ひ出しました。積み草がうまい工合に唄に合せて宗太の體をユサユサとはづませてくれました。

三

鐘が鳴つてゐるやうです。空には丁度孔雀が羽根をひろげたやうなうろこ雲が一面に散らばつてゐるうちに眞つ赤な花に變りま

した。數へきれない花の房が空からたれ下つてゐて、宗太が手のばせばとどきさうなところであらうでゐます。赤いお日さまは？

「あれッ。」

宗太はボカンとしてしまひました。ひがんなのかたまりなのです。それがだん／＼ふくれてきてとう／＼鹽のやうな大きい玉になつたかと思ふと、グル／＼と廻りだしました。そこから火の粉のやうなきれいな花がサンサンとふつてきました。

「花だ、花だ！」

やつぱり花がふつてきました。宗太は思はず手を打つてとびあがりました。

みるまに宗太の村も稻の上も花にうづもれてしまひました。それより宗太の體がうづまつてしまひさうです。夢中になつて手を振り足をあげ、踊りあがつてキヤツキヤツと笑ひころげて拂ひのけてゐるのです。

五メートル、十メートル、二十メートル。

知らぬ間に宗太は高い高い花のお山の上に立つてゐました。どこを見渡してもきれいな色

の花ばかりです。その上皆ガラスか金のやうにキラキラ光つてゐます。

「お山の大將バンザイ！」

宗太はお空に向けてバンザイを呼びまし



た。ところがどうしたのか、ふりあげた手がゾクゾク寒いのです。

「へんだなあ？」

上を見ました。お空には何もありません。

「アッ！」

宗太はあはてゝあたりを見ました。お花がみんな雪になつてゐます。宗太の足もとの雪の山はもうどん／＼解けて崩れてゐてはありませんか。

四

宗太は眼が覺めました。夢をみて干草の上からころげ落ちたところでした。

ぼんやり立ちあがりました。

冷たい風が四方からわきおこつて吹いてきま

す。お日さまは丁度今紫色になつた西のお

山にはいらうとして弱く光つてゐるところで

した。宗太はおつとみつめてゐましたが、夢

でみたやうなお花はどこからもふつてはきませんでした。いつも見る入り日と何の變つたところもあります。それでも宗太はきれいだなあと思ひました。何か胸がすうとするやうにきれいだと思ひました。

お日さまはいつてしまふと、一べんにまはりが暮くなつてきました。杉の木の下や、葛の茂みの中からむく／＼と暗い影が押寄せてくるやうな氣がして、宗太はすつかり淋しくなつてしまひました。院主さんのお話に夢中になつて、こんなところへ一人でどうしてきたのだらうと思ふと、もう一寸の間もそこにあるのが怖くて、

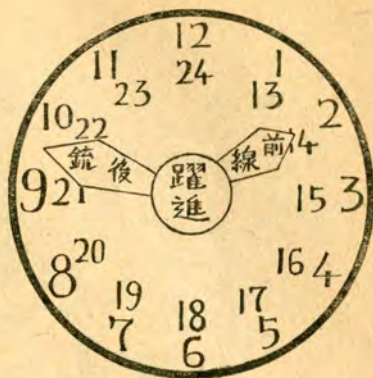
「ワアッ！」

と叫ぶと竹の棒をぎゅつと握つて、飛ぶやうに坂を下つてゆきました。

おうちでは、小舎の中で飴牛が、もう宗太がいつもの糠と切りわらのおいしい雑炊を持つてきてくれさうなものと待ちかねて

「モウー、モウー」

しきりに鳴いてゐました(野水昌子畫)



第一年の 感激で 長期戦へ進む

編 輯 部

し戦争になつても數ヶ月で壊滅させてみせる」と、實に聞き捨てならぬ暴言を平氣ではいてゐました。

一生に一度しかない國民感激の日、十二月八日が再びめぐつてきました。蔣政權擊滅に一路邁進してゐた日本が、もう大部弱つてきたので少しおせば降参すると思つた米英兩國は無茶苦茶に横暴を極めようとした。わが國に對して經濟上から思想上から壓迫するだけで日本は降ると信じてゐました。

「日本はよもや戦争はすまい。若

が、その當時米英こそがほんとの正しかつたことに敬服してゐます。そして筆者の如き迂闊なものが、その當時米英こそがほんとの

敵であること知り得なかつたのです。が、このことはいゝ換へれば思想戦に於て敵に一步をゆずつてゐたことになりませう。

思想戦といへばすぐ間諜とか機密とかを聯想しますが、第一こんな香氣な考へ方をさせることが思想戦の問題なのです。デマや誇大な宣傳はこの戦ひでの小敵に過ぎません。ほんとの敵は一時日本にも風靡したことゝる米英思想のすべてがさうなのです。従つてこの敵は始末の悪い油斷のならぬものです。米英思想とは彼等だけ獨り榮へ、他に對して隷屬を強ひさせ

る思想です。彼等の好んで口にする自由主義とは米英の侵略史をみれば判る通り、他に對し銃劍か金權をつきつけて一切の權利を奪つておいて、己が勝手氣まゝが通るやうになつてから振舞つた主義です。即ち飽くまで自己の勢力を伸ぶがための主義であります。又平和主義といふのは例へば日本に彼等の三割に當る武力しか持たせずにおいて、その上で唱へた主義です。つまり彼等が絕對優勢な兵力を持ち他に劣勢を押しつけてから口にしたものです。以前九ヶ國條約といふの

があつて、わが國が支那大陸について一言も自己の主義を通すことが出来ぬやうにしてから、條約尊重の思想を唱へたものです。

第一次歐洲大戰で獨國は武力戰で勝つてゐながら、思想戰で敗けて結局ふんだりけつたりの慘憺たる目に逢ひました。この獨國を敗かした思想戰で今また日本を敗るべく彼等は奸智を絞つてゐます。この思想戰で最も警戒を要する點は、この敵が正面から堂々とやつてくるために一寸でも油斷があるとい入り込み易いこと、一度敵に侵されると仲々追出し難いことであります。何分この敵は目に見へないため見逃し易く、いつも外からのみ來るとは限らず、何處かの隅にすでに隠れひそんでゐるかも知れません。

大詔を拜して國民一同が感激の

眞只中にゐる内に、陸に海に空に有史以來未曾有の大戰果があがり次に發表される戰果に國民は歡喜と雀躍の中に一年が過ぎました。

今日のわが國躍進の様を一年前と比較すれば一目で判ること、雲泥の差とはこのことを申すのでせう然し顧みると皇軍が餘り華やかに鎧袖一觸で敵を屈服せしめ、しかも戰場ははるかわが國土から遠い所にあつたため、われわれの心の中にとかく戰爭を甘く見勝の點がないでもありませんでした。しかしその後、幾多勇士の人業とは思へぬ奮戰振りが報ぜられ、輝く大戰果が決して偶然でなかつたことが判りました。不利な態勢から起ちあがつた我國が緒戰に大勝利を拍し、今や絶對有利な地位にあつて決戰に臨まんとしてゐることが明かになりました。それでゐて尙

從來のわれわれの内には戰時下の體制として十分でなかつた所が多くありました。緒戰に勝ちこれからは絶對不敗の地位から敵に臨み敵をして勝目のない決戰をさせるやうになつたのは皇軍のおかげです。ところが皇軍をしてこの決戰を斷乎行はしめるのはわれわれ一億の力によるものであつて、若しわれわれが思想戰に經濟戰に少しでもゆるぎがあつたなら、幾萬將兵の忠勇を棄なしにすることになります。前線の將兵が岩にかじりついて困苦缺乏に耐へ、命を鴻毛の輕きにおいて一死奉公に身を捧げてゐるなら、われわれ銃後も亦一億が一心となり、消へることのない火の玉となつて各自の職場職

場にあつて御國のため身を滅して御泰公申さねばなりません。戰爭は五年や十年で終るとは全く考へられません。われわれが五十年でも百年でも最後まで勝ち抜くためには、先づわれわれ自身の日常生活から社會の總ての機構からこの百年戰爭に副ふやう樹て直さなければなりません。戰時體制を何か臨時的のものに感じたら、それこそ經濟思想戰に敗けつゝある證據です。わが國の機構ばかりではなく、われわれの頭の中まで根本から長期戰のため建設してゆく必要があります。

大詔を奉戴したあの日の感激を思ひ出せば、何事も出来ぬことはありません。明け暮れたこの一年間の緊張と努力をこのまゝ永久に持ち續けてゆかななくてはなりません。

淨き友 信仰座談會

本年十二月より
明年一月まで お休み



微笑む開墾地

小泉 貞雄

これが今年の大戦果だ
サア来年はいよ
あの森へ進軍だ



ロンドンの神経

和田かつぢ

「キヤツ、バラシユート部隊だ」
「コラツ……」
「だから傘を
屋上で乾し
ちやいかん
といふの
に」



碰つた鐵

小泉 貞雄

「家の鐵瓶や火鉢が敵の軍艦をやつ
けたのね、まだ鐵はないかしら……」
「あるぞツ、鐵の心が」



廢城重慶の
防諜週間
です
山崎善一



「お前さん
眞夜中に人を起
してどうしたのサ」
「去年の今日の今だぜ、
ハワイ奇襲を思ふと勿體なくて寝て
ゐられるかい」

感謝
感謝
感激



山崎 善一



米國水兵募集

最優秀

ボスター

小泉貞雄



夜會開かる 和田かつち

「一體、何の祝賀會かね」

「この作が日本」

軍に無事捕虜に
なつたのだよ……

無事にネ……」

チャーチル
「君等のおかげで、國民が物を投げなく
なつて有難い」
「閣下、投げるものさへあれば投げませ
う……ハイ」

食糧不足(英國)

山崎 善一





佛教行儀と國家的行儀

(問)

小生八月上旬簡閱點

呼を受けし際點呼補

助官のお話しに、西方十萬億土を説く彌陀や淨土等の實際に存在せぬものすら信じる佛教信者中に、果して朝夕 天皇を禮拜

する者がどれ程あるか、佛壇の本尊には正しく天皇を祀り、彌陀は脇側におくべきである朝夕正信偈を讀むより軍人に賜りたる勅諭を拜誦すべしと。是れ宗教を混淆せし論と思ひますが、然し如何に考へるべきでせうか。御説明下さい。(福井坂井新保念佛居士)

(答)

他の諸宗はいざ知らず淨土宗に於いては徳川時代から「天牌」又は「聖壽牌」を本尊の眞前に御かざりして聖壽無窮をお祈願申し上げたのですが、此の頃では聖壽無窮を阿彌陀の無量壽の中に表すこととし、また一つには本尊の阿彌陀佛よりも

「天牌」の丈が短いので却つて人々に不敬と考へられるやうになつては恐れ多いので、この二つの理由から、おかざり申し上げない方が却つて正しいと言はれるやうになりました。かう云ふ譯で實際に淨土宗の寺院住職は悉く毎朝「聖壽萬歳と聖化無窮」とを御祈願申し上げない者はない筈ですから、その點呼官の認識が不十分な爲にさうした言葉が出たのではないかと想像されます。中には本尊を引きおろして中央に 陛下をお祀りせよと言ふ人もあるやに聞き及びましたが現在のやうな低い宗教觀を持つて居る國民にはむしろさうしない方がよろしいのではないかと思ひます。陛下の神聖を萬一にもけがし奉るやうなことに相成つてはなりませんからです。單

純な考へだけで事をきめてはいけなと思ひます。

次に朝夕の動行にお經よりも勅諭なり勅語なり御詔書なりを拜讀せよと云ふ希望に對しては、文部省で認めて居る宗派々々の動行を無視することは國民の傳統的宗教意義をこはすことにもなるので、それらの動行の前に、國民儀禮を行ひ御詔書を拜讀すればよろしいと思ひます。

また近來佛教は非國家的な性質をおびて居ると云ふ理由で排佛的になつて居る人がありますが、度々申して居るやうに、法然上人の淨土宗こそ最も國體に合致する宗教であつて、充分にこれを認識することに依つて一層國民の頭に國體觀念を明確になさしめると確信して居ります。

日蓮宗からの批難につき

擔當 中村 辨康

(質問 歡迎)



(問)

私は今年十四歳の一迷少女でございます。此の頃非常に苦しんで居ります。私は此の夏日蓮上人の傳記をよみました。それまでは、ほかの一つ覚えのやうに、終始南無阿彌陀佛となへすつかり安心してゐましたが、日蓮上人は佛法の開祖釋迦牟尼佛をさしおき阿彌陀佛を信ずるは不都合と、とされました。何も知らない私だつたら一も二もなく、これを信じたでありませう。けれども私は、これまであみだ佛によつて助かつた人の話を多く聞きました。阿彌陀佛を拜するがよいか、けれども日蓮様の布教

中さまのきせきが起つて、日蓮様をお助けなさいました。これはどういふわけでせうか。願はくは、愚婦の迷ひをおはらし下さいますやう。

(東京・一迷少女)

(答)

日蓮上人と雖も肉身の釋尊をさしおきその法身たる久遠實成の釋迦を立

て、しかもその久遠實成本有法身の理念たる法華經を信仰の本尊として居るのであつて、若し生身の釋尊をさしおくのが罪であるならば、日蓮上人も亦た同罪と云ふべきであります。だからそんなことを攻撃材料にするのは自己反省をして居ないからであります。日蓮宗は決して歴史上の釋迦牟尼世尊を本尊とはして居りません。曼陀羅本尊を御覽になれば一目瞭然でありますし、日蓮宗の御寺の本尊を御覽になれば結局「論より證據」であつて、釋尊は片端の方へ追ひやられて、一番目につくのが日蓮上人の座像であり、その後には少しく願目を書いた御經が置いてあります。然かも變なことにそれは支那文字で現はしてゐるのであります。つまり久遠實成の本有釋迦牟尼佛は崑崙系の文字を中心にして居たと云ふことになつて、支那に翻譯された經名を中心とするのでは大宇宙の中の一小部分たる太陽系の中のしかもその一小地域たる支那だけの、且つ近世の一支那僧の翻譯したもの、大宇宙の根源と稱する久遠實成の本

佛が採用したのととても變手古な矛盾があるわけです。しかも上の二字の南無だけはインドゲルマン系の語で、その下の妙法蓮華經は支那語ですから謂ゆる混成語ですが、こんな些細なことさへ反省して居ないで、盲滅法に他宗を排撃するのは寧ろ滑稽千萬と云はねばなりません。さう云ふ方面のことに暗い人々をそんなつまらぬことで迷はせるのは誠に罪ふかいことと云はねばなりません。

また日蓮上人の傳記に大分奇蹟が書いてあることを以て、大得意として居る向きもあるやうですが、由來宗教人の傳記には奇蹟が附随し勝なもので、それは獨り日蓮上人に限らないのです。但し法然上人傳は勅命に依つて舜昌法印が編纂しましたから若干はあるが大體さう云ふことははぶかれたと言ふか、載せてありません。つまり乙夜覽に供する爲のものでありますから、努めて正確を期したのであります。

元來奇蹟なるものは何れも謂ゆる催眠術上の暗示に依るもので變態心理學で説明しなけ



ればならぬものです。西洋などでは奇術即ち手品つかひ又は昔の飯綱使と云ふものは宗教家の一手販賣であつて、奇術を利用して宗教宣傳をしたものです。

それ程のものですから弟子や信者達の狂信迷信に依つてさう思ひ込み又はさう見きゝしたか、又はその狂信迷信を利用して暗

示を與へ催眠術にさう見せたり思はせたりしたか又は具體的に手品を使つたかでありまして正信の上からはむしろ排除されなければならぬものであります。それは假りに事實であつても小神祕に過ぎないのでありまして、公なる大神祕を見おとして居るからであります。かりに提灯の光の恩は感じ得ても太陽と云ふ大提灯の大恩寵を見る目がないと同じやうに、大神祕を忘れ大奇蹟を忘れてそんな手品の小奇蹟に目を驚かし耳を聳てる人々の氣が知れないのです。ことに傳記の中のさうした奇蹟はあとから彩色したやうなもので、

傳記作者のひいきの引きだほしであつて寧ろその人の人格を小さくしインテキ性を與へたことになつて、事實は却つて迷惑千萬の話なのです。愚かな何も知らぬ人はそれで胡麻化されるかも知れませんが、少しく宗教上の學識ある者はそのことのある爲に外のよい點ま

一つにまとめた墓の善惡

(問)

淨土九月號の「墓相と吉凶禍福」に付いての先生の御解説、有難く

拜見いたしました。付きましては私も先般或る墓相の本を読みましてところ、その内に左の如き事が書いてありました。誠に道理ある主張とは思ひますが實行上一寸まよふ者で御座います。

「墓は近來何々家先祖代々とか又は何々家の墓とか云ふやうになりましたが、それは間違ひで、墓は必ず正面に兩親の戒名を並べて書き(若し家内に死者あれば側面に書く)相續人たる者が建立して一代に一墓づゝ建立すべ

でを留引してしまふことにもなるのです。私達は寧ろ「平凡の偉大さ」を學ばねばいけません。特異性は却つて萬人の手下にはなりません。私の主張は佛教の排除するところであります。

きである。(もつとも若干の世代數を経過すれば合祀するも支障なし)」と書いてありましたが、先祖を敬ふ意味に於て結構とは思ひますが、出来る事ならやはり先祖代々と一つ墓にをさめて叮嚀にお祀りした方がよいと思ひます。此の點如何すべきでせうか。

(答)

御承知と思ひますが、墓は卒都婆の變形ですから、五輪塔にするのが本當で、大體鎌倉時代までの墓は五輪です。之は眞言天台の影響を受けたもので、五

(静岡・濱名・三方原・酒井與市)



大を表したのであります。一切萬物は五大を離れない人間のからだを「四大假和合」と云つて居るやうに、(空大は場所のこと)五輪は人體に形取つたものと言はれて居ります。そう云ふ點から嚴密に言ふとお墓は一人一人にするのが本當ですが、それでは廣い場所と多額な費用とを要しますから、正面を「何々家の墓」とか「先祖累代の墓」とかして側面に其家代々の先亡の戒名を彫りつけるやうに簡易化したのであります。随つて昔よりもお墓が立派になり永遠性をもたせただけに費用も澤山かけるやうになつたのであります。ですから時代に適應した結果であつて是れ止むを得ないことであります。支那の墓は土饅頭で日本のやうな石碑は彰徳碑のやうな類に用ひられて居ます。

日本のは日本流の獨特のものですし、嚴密には夫婦を一つ石に並べるのも佛教的な意味ではありません。人情から來たもの

であります。

既に夫婦が人情の上から並べられることを許されてあるならば親子も兄弟も一つものに並べてもよいわけであり、先祖以來の諸靈をならべてもよいわけですから、その墓相學目

お蠟燭のこととお經のこと

(問)

お蠟燭を佛様に上げるのにお葬式の時赤色蠟燭を嫌ふのは何う云ふわけですか。また亡き靈をなぐさめるには何うすればよいですか。また信仰をさせるには何うしたらよいでせうか。

またお念佛は生きて居る人の心のあかや煩惱をおこらぬやうにと、お經が作られて居ると思ひますから、そしてまた亡き人の爲、生きて居る人の爲にお經が作られてあるのですから「淨土」にお經を分り易く書いて下さ

い。(青森・東津輕・平館・九尾久二)

(答)

お葬式の時悲しい時ですから、華やかなものを排して成るべく清

體に既に矛盾があり破綻がありますから、そんなことにお迷ひになることはいらぬことです。

お分りになりましたでせうか。

淨な簡素のものを用ひます。それで赤蠟燭などを使用しないのです。

亡き靈をなぐさめることの最も大なることより外にないのですが、さてこの念佛させることは、みんながよい人になること、信仰人になることです。

次に人々に信に導く方法は念佛させることが中々容易なことではありません。結局努力でせう。常にそのことのみを意願して一心に努めるより外に手段はありません。

次にお經のことを分り易く淨土に掲載しろとの御注文ですが、出来るだけ御期待に添ひたいと思つて居ります。

増谷文雄君の

「行誠上人」を讀みて

浄土宗教學部長

江 藤 澁 英

このごろ私は恥しいことではあるが、纏つた一書を繙讀するといふことが絶えてゐる。讀書の暇が皆無だといふやうなことは誰にでもあらう筈がない。無論私は忙務を口實に讀書をいとふやうな考へも毛頭ないが、事實東奔西走してゐるので、汽車の中や旅館の宵が僅かに私には恵まれた讀書齋でもあるのだ。従つて新刊雑誌や手輕い讀物が私にはいつも旅の伴侶となつてゐる。

最近、車中で云ひしれぬ感激の裡に讀破した一書に、増谷文雄君の「行誠上人」がある。それは忘れもせぬ先月の十五日の午後である。特急「かもめ」で東京を立つた私は、横濱を過ぐるころ巻を開いたのであるが、名古

屋近くまでかゝつて讀み終えた。その間ほんとうに夕食さへ忘れて讀み耽つたのであつた。たゞ沼津を過ぎて車窓に富士の靈姿が映つた時、この日はよく晴れて崇高な山容が心ゆくまで眺められたが——、その暫時だけは巻を捲いて、眞に私は無量の感慨を以て靈峰に見惚れたのである。この時はどまた清々しくもけ高く感ぜられたことはなかつた。

◇

私はこゝ七八年間、毎月キット一二回は東海道線を上下してゐる。夜間のことも多いが、富士の靈姿を車窓に望見することが何よりの大きな期待である。曉闇に、眞晝に、薄暮に、春夏秋冬、いつも飽きぬ姿は富士の崇

高さである。増谷君は「行誠上人」の巻頭に、上人の富士圖に題する一詩、「八面玲瓏玉放光全身潔白雪爲裝凌天一万三千尺恰似老僧一寸腸」を引いて、「富士の靈峰こそ、この上人の偉大なりし存在を喻へるに最も相應しきものでありませうか。八面玲瓏として、全佛教界の群峰を眼下にし、天を凌いで聳え立つてゐた存在、それがこの上人の明治佛教界における存在であつたのであります」と述べてゐる。げに上人こそは明治初期の佛教界に在つて、學問に於て、徳化に於て、識見に於て、文藻に於て、どの點から見ても眞に八面玲瓏として光を放つ珠玉的存在であつた。増谷君は「この富士の如く巨大にして八面玲瓏たりし上人の面影を描かんとするに當つて、私の禿筆は、先づこの上人の何れの一面向より描き始めればよいのでありませうか、私は甚だ當惑せざるを得ないのであります」と述懐してゐるが、本書こそは増谷君が敬虔な筆致で、よくこの大上人の各方面に亘る玲瓏たる芳躅を描き出して遺憾なきに、私は惜

みなく讃辭を捧ぐるものである。

◇

本書は四六版二三〇頁の一小冊子ではあるが、しかも大上人行誡の眞貌を充分に躍如たらしめてゐると思ふ。勿論全集ではないから、本書に依て高邁なる上人の論説や、豊麗なる文藻を、はたまた逸事佳話を知りつくすことは出来ぬが、高僧傳をものするに獨特の健筆を有する著者は、よくもこの大高僧の眞の尊い姿を、この一小冊子に手際よくまとめたことに私は深く敬服する。著者は先づ學僧としての上人について、その學問の仕方、主張、業績などを叙し、次に上人の高徳について、その風格、芳躅、遺書等を説き、第三には明治維新の際廢佛毀釋の渦中に立つた上人の凛しい姿と、毅然たる大識見とを、幾多の當時の法令や文獻と併せ描いて、現下教界の危期に立つ吾等佛教徒に、多くの示唆を與へてゐる。第四には上人の文藻について、和歌、紀行、詩書等を擧げ、附録として著作解説と年譜を添え、學に、徳に、識見に、文藻

に各方面に圓滿なる上人をよくこの一卷に收めてゐる。

◇

私は宗寶靈蹟の再調査の旅に美作路に入り、誕生寺、菩提寺を訪れたが、途すがら本書の讀後感を吹聴したことであつた。それから廿五日宗祖の御忌日に歸東したが、京都から東京への車中で本書を再び繙いた。この日も珍らしく富士の靈峰は夕闇の中に雄姿を聳立して、何ものかを私に暗示するかのやうであつた。再讀卷を掩ふを忘れしむる本書は不思議な魅力を持つてゐる。それは強ち増谷君の麗筆のせいのみではなく、上人の芳躅そのものではあらうが、しかし巨大な上人の行履芳躅がまたよく増谷君の麗筆に依つて描出されてゐる結果に外ならぬと思ふ。ともあれ本書は最近私の讀んだ書物の中で私の心を強く捉えたことは事實だ。私は東京に歸るとすぐ十數部を求めて知己の僧俗に送つて法末を頒つた。今こそ眞に私共は上人の遺訓に教へられることが多い。敢て一本を江湖に推奨する。

(本書發行、B六版二三〇頁定價一圓六十錢 送料十二錢)

陸海軍病院慰問淨土

寄附者芳名 (敬稱略)

一圓五十錢	廣島縣双三郡八幡村淨土寺	吉田	法隆
一圓五十錢	横濱市神奈川區澤渡町五五	八城	チカ
一圓五十錢	兵庫縣水上郡國領村棚原	荻野	公原
一圓五十錢	臺北市幸町一三五	金山	ミツ
四圓五十錢	靜岡縣富士宮市大宮	大頂寺檀徒有志	
一圓五十錢	三重縣桑名市清水町	五井	とよ
一圓五十錢	岡山縣金浦町吉濱	松枝アヤ子	
五圓	妙定院檀徒男	正親町季季董	
一圓五十錢	大牟田市曙町一七、淨心院內	井村	正喜
二圓十錢	青森縣五所川原町願昌寺	小山内龍心	

俳

壇

太田耳動子選



柏崎市 市川 繁

赤蜻蛉雪のごとくに來りけり
 評 天日爲めに晴し」といふ
 感じを興へる程の赤蜻蛉の大
 群を想像する。雪の降つて來
 る如くとは素晴らしい表現で
 ある。多くの作者の中には、
 自己の創作ではなく、先輩の
 美字美句を借りてきて表現す
 る人があるが、それはとらな
 い。ついでではあるが理性の
 世界にある教訓めいた句を作
 る人があるが、それはとらな
 いたものでなければならぬ

臨時 天津 陸病 深尾 重三

退院も定まり蚊帳に別れけり
 評 秋は吾人に回顧の時を與へ
 る。長い療養生活も目度く
 終りを告げる退院の期日が決
 定した。蚊帳にも別れた。そ
 れにつけて、しみじみ、來し方
 を、戦場の事、戦友の事に思
 ひを走らせてゐる作者を想像
 することが出来る。

「蚊帳の別れ」に依つて此の
 句を高いものにしてゐる。

名古屋市 堀場 典雄
 曉の明星露の空にあり
 評 多くの星は既に消えてしま
 つた。曉の明星も光芒を收め
 てぼんやりしてゐる。地上の
 ものは盡く露けくなつてゐ
 る。空でさへも露氣の爲めに
 白々としてゐるといふので、
 此の一時は一日のうちで或は
 四期を通じて最も神聖な時
 で一年のうちの元旦にも比す
 べきである。露の空」がよい

湯にとけて寛の清水落ちにけり
 東京市 八木壽美男
 秋雨のほそ／＼として肌沁む
 島根 石見 千翠
 梵鐘のお召をつけて彌陀の秋
 近江 田中民五郎

假寝を何に例へん快よき
 大阪市 清水 我聞
 憂として地につきたる木の葉かな
 京都市 竹内 修吾

月のなき嵯峨野巡りて悔もなし
 茨城縣 眞木謙太郎

樹こだま秋光深く夢み入りし
 和歌山市 田中 英夫

蟲聞くも今宵かきりの山の宿
 小樽市 中村 茂舞

しめやかに庭石ぬらす時雨かな
 東京 清水 菊藏

蝶々の白く光るが冷やかに
 朝鮮平壤 三浦砂千子

秋の浪寄せて木立の影深く
 東京 渡邊 一念

蜻蛉の堤に月の蜃をさる
 同 三野輪幸節

隨風の去りたる朝の濱を踏む
 同 坂口 光雄

秋風にはた／＼鳴りし桐葉かな
 名古屋 友淵袈裟雄

柳やせて日毎に湖畔透きてきし
 東京府 萩原 通孝

秋風や弟が弾くマンドリン
 明石市 山本多可子

手に跳ねてきて飛びさし稲子かな
 島根 仁 阿 彌

雪舟の庭も秋なり蟲の聲
 京都市 拜郷 賢三

樵人の煙に秋の暮るゝなり
 新都市 四ツ倉榮次郎

朝もやに通りてをり秋の山
 山口縣 吉原 元明

御遺骨を迎ふる驛や今日の月

埼玉縣 瀧川 信雄

秋空の果までつゞきあかんとほ
 富山縣 佐伯 光安

石山の岩間輝く秋の月
 京都市 永田 七郎

稻も柿も實りて重し國の秋
 同 福島孝治郎

蟲の音止む時人の立話
 名古屋 江崎 孝融

白菊の花の香のしむ位牌かな
 高知 横山 亮圓

山寺の古き釣瓶や赤とんぼ
 奈良 五葉 念香

秋晴の御旗を高く揚げにけり
 廣島市 山口 勇治

芙蓉咲く庭に淡しも歸り花
 長野縣 上條 豊

朝毎にむかふ朝日の秋新た
 青森縣 丸尾 傳山

落葉よりぬきいでたるきのこ
 小樽市 中村 もん

短日や屋根石おもき海女の家
 岐阜縣 安井 眞了

朝露の重さありけり稻の秋

投稿規定

官製はがき一回二句以
 内とし住所氏名明記
 の上「俳壇」編輯部俳
 壇係あてに送ること



法語
解説

聲に即する決定の信

法然上人法語抄解説（その十二）

中村 辨康

法語

せこにこめたる鹿も、友に目をかけずして人影にかへらず向ひたる方へおもひきりてまひらに逃ぐれば、いくへ人あれどもかならず逃げらるゝなり。その定に他力をふかく信じて萬事を知らず往生をとげんとおもふべきなり。（勅傳二十一）

人の手より物を得んするに、すでに得たらんと、いまだ得ざると何れか勝るべき。源空はすでに得たる心地にて念佛は申すなり。（勅傳二十一）

往生は一定と思へば一定なり。不定と思へば不定なり。

（往生大要抄）

念佛申さんの十人あらんに、たとひ九人は臨終あしく

して往生せずとも、我一人は決定して往生すべしと思ふべし。（念佛問答集）

一丈の堀をこえんと思はん人は一丈五尺をこえんとはげむべし。往生を期せん人は決定の信をとりてあひはげむべきなり。（東宗要）

煩惱のうすくあつきをもちかへりみず、罪障の輕き重きをも沙汰せず、唯だ口に南無阿彌陀佛と唱へて、聲につきて決定往生のおもひなすべし。（東宗要）

（法語抄五五、五六、五七、五八、五九、六〇）

解説

佛教に「獅子奮迅三昧」と言ふのがあります。釋尊は常に何事に對してもこの「獅子奮迅三昧」に仕して爲された

と傳へられて居ります。即ち獅子が他の獸に對する時は如何なる小敵に對しても全身の力をこめてそれに飛びかゝるのが謂ゆる「獅子奮迅」の有様なのですが、それと同じやうに一小事と雖もこれをゆるがせにせず全力を傾注して一心不乱にそのことの完遂に努力するのが「獅子奮迅三昧」と云ふことであります。

今この御法語の鹿の譬も畢竟は脇ひら見すに必至になつて突入すれば何んな困難なことでもなし遂げられることを示して、念佛の信もそのやうに萬事を捨て、専心になすべきことをおすゝめになつたのであります。萬事を捨てると申しましてそれは一旦のことでありまして、そこから盛りあがつて来る力は却つて萬事を徹底せしめるのであります。彼の劍道の極意の歌に「身を捨てゝこそ浮ぶ瀬もあれ」とありますのも同じ道理であります。

「すて身の構へ」で突進するこそは何事をなすにも一番大切な身構へ心構へであります。殊に他力の信仰はすつかり自力心を捨てた「捨て身」でなければ獲得し難いのであります。

また信仰のことは多少でも疑ひがあつては駄目ですから、充分に疑惑をはらして置かねばなりません。信仰の

「一定」と「不定」との差は「得た」と「得ない」との差に外ならないのでありまして、しつかりと手の中に「物を得た」如くに「信」を得て置かねばならないのですし、若し「不定」の状態即ち「若存若亡」の状態であつたならば、それを「一定」ならしめ「決定の信」とならしめなければならぬわけ、念佛人たるものはそこをはつきりして置きたいものです。往生大要抄の中の「一定と思へば一定だが不定と思へば不定である」と言ふ法語を何となく讀むときは信仰は觀念的なあやふやなものであるかのやうに受取られ易いのですが、それは讀みかたの力が足らないからであります。信仰は決して觀念的なものではありません。宇宙間の凡てのものは謂ゆる物心一如、色心不二であります。信仰に依つて生活があらたまり、生活の如何に依つて信仰が一層確固たるものとなるものです。則ち「思ふ」ことは精神の一作用ではありますが、その人の日常生活や學問教養の深淺や時代思潮の影響や其他のものがその「思ふ」ことの内容を裏付けて居るのですから、單なる浮雲流水の如きものではありません。

されば「念佛問答集」の「十人のうち九人までいけなくても自分は屹度目的を貫徹する」と云ふ御法語もあるので

ありまして、たとひ百人が百人とも偽善的信仰であつてもそれは畢竟「我に於いて何かあらん」であつて決して問題とするに足らないのであります。

往生は世にやすけれど皆人の

まことのこゝろなくてこそせぬ

の御歌のやうに、殆んど凡ての人は「至誠心」が足りないので信に徹し得ないのです。もつともつと眞剣にならなければなりません。何うもまだこゝろがなまぬるくて眞剣な氣持になりかねて居るやうです。もつと求道心が熾烈にならなければいけないのに何故か熾烈になつて呉れないのです。誠に残念なことですが、傍から必要を説かれその心を燃え立たしむるやうに促がされても、謂ゆる曠劫の味執を深夜の眠にして申々覺めては呉れません。まことに睡蛇ふところに住んで容易に出て行つては呉れないのです。ですから私達は人一倍の努力が必要なのであります。何事も一心にならなければ成功しません。徹底的に一つものを貫き得れば必ず他のことにも精通し得られます。何でもよいから達人にならなくてははいけません。この故に人は誰でも達者たることを心掛けて行きたいものです。まして信仰人たる者は「念佛の達人」になるやう一心に努力

すべきであります。

また一丈の堀を越えるには一丈五尺の堀を飛びこすぐらゐの努力と熱心さとがあつて初めて飛びこせるものですから、信仰に於いてもまた充分に「決定の信」を取ることが肝要であります。何事も自分の心が「不定」であるなら凡て駄目です。何處までも「獅子奮迅」の氣迫をもつてはげまねばなりません。

元より淨土教では煩惱のうすき厚き、罪障の輕き重き、業障の多き少きを論じては居ません。それは信仰に依つて如來の増上緣力が加祐されるからでありまして、根本的に罪障業障煩惱障が消滅したわけではありません。則ち船で運搬すればどんな大石でも水に沈むことなく海を渡すことが出来ますし、また向ふに渡つてしまへば謂ゆる土徳に依つてそれ〴〵有效に役立ち得るのです。或は庭石ともなり、沓ぬぎ石ともなり、柱石ともなり、池のふちの石ともなり、飛び石ともなり、夫れ〴〵分に應じ力量に應じて同じやうに煩惱障罪障等を斷除しなくとも如來の大願業力に依つて生死の海を渡り得られるわけです。ですから「如來の本願に乗ずる」ことが肝心要であります。それなくしては三障重くして到底何うすることも出来ません。

罪障とは現在になした罪とがのことであります。業障とは過去に於いてなした罪過の集積に依る力のことであります。

また煩惱障とは罪障業障の原因となりつゝあるその造罪の基礎のことであります。煩惱が本となつてなすところの動作が罪であり、その罪の集つた力が業と言はれるものであります。

ですから三障とは申しますもののその根本的なものは煩惱であります。煩惱は大別すれば無明惑、塵沙惑、見思惑の三種となります。また一に根本障、所知障、煩惱障とも申します。

佛教修行の第一段階としては何うしても第一の見思二惑の煩惱障を取りのぞかなくてはなりません。そして初めは佛教理論即ち縁起の理を知り學ぶことに依つて見惑を斷じて行きます。これは思想上のことですから、少し勉強さへすれば理窟だけはのみこめます。それで「見惑頓斷」と古來から申しては居ります。

然るに「思惑」の方は一層容易のことでは屈伏が出來ません。この方は「生活」の一々の細いことについてのものですから、事毎にうるさく葛藤を生じます。現前の一問題

は解決し得ても、あとから新しい問題がそれからそれへと出て來て寸暇なく戰つて行かねばなりません。しまひには苦しくなつて「もう佛道修行を止めやうか」と心がぶつて參ります。餘程の努力と策動心とが在るわけです。

これを「思惑漸伏」と申します。この思惑との戦ひは恐らく一生かゝつても終結とはならないでせう。イヤ二生三生かゝつたとて見込みはありません。茲に三大阿僧祇劫なと云ふやうなとつともない考へが出て來るわけでありま。それ位の持久戰でなくては「恐らくは駄目だらう」と想像されたからでせうが、實は三大阿僧祇劫を経ても駄目なのです。訓練に依つていくらかよくなるではありませうが、根本煩惱たる無明を「明」に變形させない限り駄目なのは分り切つたことです。

更に菩薩としては度生の爲に色々なことを知らねばなりません。これはまた數限りもないことです。から、一名を「塵沙の惑」と呼ぶやうに細かな塵とか砂とか云ふものに譬へて、その無數なることを示して居ります。なぜそれが「惑」であるかと言へば、それらを心得ざることに依つて教化力がにぶるから、一種の惱みともなり迷ひとも言はれ得るので、まどひといつたのであります。それは根本には

つきりした「明」がないから惑ひとなり迷ひとなり惱みとなるのでありまして、若し根本的な精神の「明」即ち見きはめ、徹底があるならば、それは直ぐ解決がつくのであります。

ですから問題の問題たるべきものは、見惑と思惑と無明惑とであります。

この三つのうち「見惑」を破るのは比較的容易であると云はれて居りますが、之とて然かく簡單ではありません。則ち見惑を分つて身見、邊見、邪見、見取見、戒禁取見の五を五利使として貪、瞋、痴、慢、疑の五を五鈍使と申します。此の内最初の「身見」即ち「私のからだ」と云ふ考へにしまして、第二の苦樂、有無と云ふやうな右か左か一方づけて見やうとする心に致しまして、中々執念深いものであつて、之が正見に訂正され得たら實に素晴らしいのです。

また第三の邪見は謂ゆる顛倒の妄執で前の身見邊見もこの邪見の中の一部です。これらは邪見の中でも主要なものですから特にぬき出して注意せしめて居るわけです。第四の先入主見取見も第五の迷信戒禁取見も共に取見即ち妄執であつて、是亦た邪見の一種で固執のことを言つたもの

です。ですから五種にかぞへては居りますが、實は皆な「邪見」の一に攝せられるべきものであり、具體的には第一の身見、第二の邊見が破られる時、その目的の大半は達成せられるのであります。次に思惑の内、第六の貪、第七の瞋、第八の痴の三は三毒の煩惱と云はれるものですが、茲では特にその「見」即ち思想的な考へ方をさすのであります。

また第九の慢も第十の疑も共に思想的なものであることは言を要さないでせう。然るに次ぎの「思惑」は貪瞋痴慢の四種ですが、名前は見惑の五鈍使から「疑」を除いたものと均しいが、實には生活上の問題でありまして前の思想的なものよりもつと執念深いものであります。殆んど本能的になつて居る妄執であります。

則ち思惑の「貪」は「生きたい」と言ふ本能ですが、その本能に輪をかけて何でも取り込まうとする氣持であり、瞋は「食はれまい」とする防禦方法、例へば獅子がたてがみを立てたり、鶏が蹴合ひをするときに頸の毛を逆立て、敵を威嚇するあの外敵防禦の爲の「いかり」が、過分に度を越して發現して來るからいけないのです。あの「瞋」の姿は如何ですか。どうも餘り感心したものではありません。

ん。まだ次ぎの痴は「生きて居ることが何の爲やらさつばり分らない」と言ふ迂闊な状態のことです。また慢の氣持は私達が生き行くために必要な「思」ではありますが、それが行き過ぎて我愛、我慢、我利と進んで来るからいけないのです。

この様に見思の二惑は通常のことでは中々容易に伏滅させることは出来ません。聖道門ではそれを哲學的な思索と道德的訓練とで矯めて行かうとするのですから、色々問題になるのです。

然るに信仰に依れば謂ゆる「不斷煩惱得涅槃分」であつて「得涅槃」ではないまでも、そのわずかな一分を得られることは事實です。即ち「南無」の心境の中には「見」も「思」もなくなつてたゞひたすらに如來大生命の中にとけ入るところの歸命の念が動いて居るだけであります。それは一瞬時のことかも知れません。

然したとへ一瞬時であつても事實は事實であり、その一瞬時のつかかさなりが一分五分三十分一時間一日となるのですから、何れ一瞬だからいけないと云ふ理由はないと思ひます。

瞬て結構です。謂ゆ「一念萬年」のつて一念の中

に永遠の生があるのです。但しそれには「聲」に即する「信」が必要でです。

聲なき「信」は具體的でないから概念化してしまひます。行業は身業口業意業の三を出ませんが、意業は獨立して居ると概念となる恐れがあります。何うしても身業か口業かを伴はねばなりません。そして身業よりも口業の方が手取り早いです。しかも眞實な心は聲に現はれ易いから、その最低標準を「聲」に置くのは尤であり、且つ聲に就いて直ちに「念」が現はれ得るので、標準とすべく誠に具合がよいのです。然し聲が機械的になるとツイ雜念妄念が湧いて來て、外形は念佛してゐるやうに見へて居ても、心の方は「念聲是一」となつて居りません。そこで「聲について決定往生の思ひ」をなす必要が痛感されるのであります。

これは實際問題ですから御自身にためして見て、念佛の聲に應じて決定往生の思ひが出來て居るか何うかを吟味して頂きたいと思ひます。若し念佛して見てそれが出來て居ないやうならば一日も早く出來るやう一心に修練して頂きたいものであります。

編輯後記

◇米率 國に對する宣戰布告の大詔發せられて、ここに一周年を迎へました。感慨もこも迫り來るを憶へます。合掌

◇臨時ニュースが放送される度に印刷所の係が校正室にゐた私の所に早く聴きに來るやう教へてくれました。

◇印刷所に働く何千の人々が皆激情にふるへて仕事に手がつかぬ様子が室にゐてもよくわかりました。

◇受信機から絶え間なく流れでる感激の埒場の中にあつて、私は「宣戰布告の大詔を拜して」の一文を認めました。これは校了になつた正月號の當誌に後から入れるためですが、一行書いては筆を置き、幾度溢れ出る涙をぬぐつたか知れませんでした。

◇われわれは自分達の手によつて新しい世界の歴史を創るのだ。われわれ

撃を解 兵 苦でもわれから進んで受け入れようといふ決心しました。

◇あの日の緊張し切つて輝いてゐた人々の顔は終生忘れ得ない印象となつてゐます。それから一ケ年の間、あの日の感激を思ひ出しては自分を鞭打つてきました。

◇一年前を回顧して若し 大詔發せられずにあのまゝ事態が推移したなら今頃の日本は何うなつてゐたか、考へるだけで慄然たるものがあります。

◇敵國にグルリと取りまかれた不利な態勢から奮然たちあがつて、この大戦果をあげ、緒戦を勝ち抜き不敗の地位から決戦に臨まんとしてゐます。

◇先づ身の廻りから日一日と漸次百年戦争への準備をはげみ、努力してゆかぬことには長期戦は望めないでせう。

◇本會總裁郁芳隨園宛下から「大詔奉戴一周年を迎へて」の所感を戴きました。

◇吉田絃二郎先生はますます御元氣で、活躍されてゐます。玉稿を頂き厚く御禮申し上げます。

◇石橋徳作氏の「靈の堂守」は奇しくも同氏が直接指導して、不良兒が發心し、一身を修業にさゝげしめた實話です。

◇本會の會費は御承知の通り前金にてお拂込み願ふことになつてゐます。従つて會費を前金にて頂いてゐない各位には當誌の發送を停止いたす場合があります。

◇また會費未納の御通知を差し上げる場合がありますが、これは前金が切れてゐる場合ですから御諒承願ひます。

◇御送金には振替郵便が御便利で確實ですが、何卒「通信欄」には御用向は勿論、御感想をもなるべく詳しく御記入願ひます。(封書)

淨土 十二月號

昭和十年五月二十日
第三種郵便物 認可

昭和七年十二月一日印刷納本
昭和七年十二月一日發行

(定價十二錢)

東京市芝區芝公園十五號明照會館
編輯兼 眞野正順
發行人

東京市芝區芝公園十五號明照會館
印刷人 赤尾光雄
東京市牛込區西町七(東京一)

印刷所 大日本印刷株式會社
配給元

東京市神田區淡路町二ノ九
日本出版配給株式會社
發行所 法然上人鑲仰會

東京市芝區芝公園明照會館内
振替東京八二一八七番

「淨土」購讀規定

一部定價 金十二錢 (送料一錢)

(送料一錢)

會費 金一圓五十錢 (送料共)

一ケ年

腦の病・神經系統諸症・神經痛
腦溢血・鼻・耳の病・不眠症

綜合的優秀藥

光明丸

主治效能

腦神經系統諸病、神經病、腦神經衰弱、不眠症
てんかん、腦膜炎、ヒステリー、小麻痺（ヒキ）、兒麻痺（ツケ）、腦
梅毒、梅毒、腦溢血、半身不隨、心悸亢進症、
逆上、耳鳴、腦貧血、頭痛、鬱血、（肩首コリ）
神經性（耳病）、神經性（鼻病）、記憶力減退、
思考力減退、精力減退、健忘症、性的神經病一
切、神經性變屈症、小心恐怖症、恐迫觀念、憂
鬱症、誇大妄想、取越苦勞、雜念妄想、多夢症
胃腸障害、便秘症、神經痛、ロイマチス、關節
炎、以上ノ諸病ニ用ヒテ著効アリ

藥價	
六日分	貳圓
十日分	參圓
廿日分	五圓
卅日分	七圓

全國有名藥
店・一流百
貨店ニアリ
品切ノ節ハ
直接本舖へ
御注文下サ
イ

試供藥と
説明書を
進呈

謹製領藥元 願 成 閣

京都伏見いなり山
代理店 全國一流賣藥卸賣會社

昭和十年五月廿日第三種郵便物認可（毎月一回一日發行）
昭和十七年十一月廿日印刷納本・昭和十七年十二月一日發行

淨土 第八卷 第十二號

（停）定價金十二錢（送料）
滿鮮等 金十三錢
外地定價 金十三錢